

ハワイ・北米における日本人移民および 日系人に関する資料について(4)

神 繁司

はじめに

I. 外交史料 (外務省資料)

- [1] 外務省記録
- [2] 日本外交文書
- [3] 領事報告
- [4] その他

II. 府県庁等地方公文書・県史等地方史誌

- [1] 地方公文書
- [2] 地方史誌

III. 統計・名簿・名鑑・年表

- [1] 統計
- [2] 名簿・名鑑
- [3] 年表

(資料番号: 1-153, 以上第47号)

IV. 文献・史資料目録

- [1] 各機関所蔵目録
 - (1) 国内諸機関所蔵目録
 - (2) ハワイ・アメリカ諸機関所蔵目録
 - (3) カナダ諸機関所蔵目録
- [2] 邦語文献目録
- [3] 欧文文献目録

V. レファレンス・ワーク

- [1] 辞典・事典
- [2] 参考図書

(資料番号: 154-264, 以上第48号)

VI. 概説書

- [1] 研究史
- [2] 通史・概説書
 - (1) 移民政策・移植民論
 - (2) 通史・概説
 - (3) 資料集・叢書

(資料番号: 265-447, 以上第52号)

VII. 新聞

[1] 概説

(1) ディレクトリー

(2) 概説書

(3) 新聞人の詳伝・研究論文

[2] ハワイ

[3] アメリカ本土

[4] カナダ

[5] 国内発行新聞の記事集成等

(資料番号：448—567, 以上本号)

VII. 新聞

「VII. 新聞」では、まず [1] 概説で、ハワイ・アメリカ本土・カナダで発行された日系新聞（各種団体等機関紙・強制収容所発行紙を含む、日本人・日系人が発行する邦字紙及び外字紙、以下同）について記載・記述のある「ディレクトリー」（年鑑・名簿類）、全般的な概説・関連文献を収録し、新聞人の略伝に続けて評伝・研究論文を収録した¹⁾。[2]—[4] では、各地域の日系新聞についての概論的な文献を収録し、[5] では、日本国内発行紙等の「新聞集成」「記事目録」類を収録し、移民関係新聞記事検索の便とした。

[1] 概説

(1) ディレクトリー

448. 『新聞総覧』明治43年版-昭和18年版（欠あり）、日本電報通信社

<YDM101739ほか>

北根豊監修『新聞総覧』明治43年版-昭和18年版、全33巻、大空社、1991-95（日本電報通信社刊の複製）
<UC126-E23>

『大阪朝日新聞』等の記者として活躍し、「日本電報通信社」（現、広告会社「電通」）を設立した光永星郎が、日本国内外の邦字新聞を網羅するという方針で創刊、1910年（明43）から1943年（昭18）まではほぼ毎年刊行された²⁾。新聞名・所在地・組織・創立年月・紙幅・広告料・印刷設備・幹部氏名等を纏める「全国新聞一覧」及び、各社沿革・現況・幹部略伝を記述する「日本新聞紙」等からなる。

第1巻（明43）では、「全国新聞一覧表」に『布哇日々新聞』『布哇新報』『日布時事』が、「日本新聞紙」に『布哇日々新聞』が記載されている。最終巻（昭18）では、内容体裁が異なっているものの、時局柄、ハワイ・北米の邦字新聞は記載されていない³⁾。ハワイ・北米の日系新聞について参照するには全く不十分ではあるが、近代日本の新聞界の動向を知るうえで重要な資料である。

449. 『欧米諸國に於ける新聞調査』大正11年12月現在、外務省情報部第二課、1924

<UC123-8>

450. 外務省情報部編『外国に於ける新聞』昭和12年版, [外務省情報部] [1937] (支那及満洲国は除く) <UC4-11>

451. 『世界新聞要覧』上巻 (満・支以外の各国), 昭和14年版, 外務省情報部, 1939 <UC123-3>

上掲449-451は, 何れも, 在外公館の調査報告に基づいて編纂された秘密調書。主要国の新聞界状況を概観し, 各新聞について新聞名・主義・持主・主筆・備考 (創立年・発行部数・経緯・特色等) を纏める。各国主要紙の対日論調が簡明に記されていて有用。邦人経営の新聞は, 各国の部に, あるいは付録として収録されているが, 網羅的なものではない⁴⁾。また, 記載事項, 特に創立年について誤りがあることにも注意を払う必要がある。

452. 『世界新聞要覧 北米合衆国編』第1集, 外務省情報部, 昭21 <070.3-G15ウ>
戦後の新たな状況に応じ, 上掲451の改訂版として, 比較的資料入手の容易な北米合衆国の一部を第1集として刊行したもの。「連合軍総司令部民間情報教育部図書館」所蔵資料に基づいて編纂, ハワイ・カリフォルニア州等14州について収録するが, 邦字紙についての記述はない。

453. 「海外にある日本字新聞早判り」『海外』3(15): 昭3.5(日本宣傳號), pp. 90-94 <雑19-149>

海外雄飛を試みる者は, まず海外事情に精通することが必要であり, その手段の一つとして, 海外邦字新聞の購読を勧めている。「南北両米布哇^{ジャワ}・爪哇」の邦字新聞について新聞社住所を付し, 簡単に案内する。

454. Chapin, Helen Geracimos. **Guide to Newspapers of Hawai'i: 1834-2000.** Honolulu: Hawaiian Historical Society, 2000. <未所蔵>

1834年, アメリカ人宣教師 Lorrin Andrews によって, ハワイで最初の新聞 'Ka Lama Hawaii' (The Light or The Hawaiian Luminary) が発行された。本書は, 1834年から2000年までにハワイで発行された新聞約1,250タイトルのデータについて収録する⁵⁾。

Section I "Alphabetical List of Newspapers" はタイトルのアルファベット順に, 新聞のカテゴリー^① (Establishment, Alternative, Military, School, Hawaiian, Japanese…) / 言語^② / 発行地^③ / 頻度^④ / 発行期間^⑤ / 発行者・編集者^⑥ / 変遷^⑦ / 典拠^⑧ / 所在^⑨等を, 注釈^⑩付きで収録する (下掲エントリー例参照)。Section II "Categories of Newspapers" はカテゴリーのアルファベット順 (African American, Alternative, Chinese…Japanese…Vietnamese) に新聞タイトルを収録。日系紙 (Japanese) は, 別タイトルも含め146タイトルに及んでいる⁶⁾。Section III "Newspapers in Print by Years 1834-2000" は, 創刊年順リストであるが, 創刊年のなかを新聞タイトルのアルファベット順で配列しているので, 正確な創刊順は一覧することができない。

(エントリー例)⁷⁾

Hawaii Hochi (Hawaii News Record)

Japanese^①/Japanese and English^②

Honolulu^③, weekly, then daily^④, 7 Dec 1912- Oct 1942. 1952-^⑤. Pubs: Hawaii Hochi, Frederick K. Makino, Mrs. Frederick Makino, Shizuoka Shimbun, Konosuki Oishi, Paul Yempuku (2000). Eds: Frederick Makino, Kenji Hamada, Mitsunori Shoji, Keiri Kanbayashi (2000), et al. Eng Eds: George Wright, James Brown, et al.^⑥

Sakamaki, Union List^⑧

HSL mf, UHM mf^⑨

One of Hawai'i's two most influential Japanese language papers (with Nippu Jiji). An English section added in 1925 as The Bee, George Wright ed. Makino (1912-1953) crusaded for equal rights and fair treatment for Japanese Americans....^⑩

Nippu Jiji

Japanese^①/Japanese and English^②

Honolulu^③, daily except Sun^④, 1 Nov 1905-22 Oct 1942^⑤.

Pub: Honoruru-Shi Nippu Jiji Sha; Eds: Yasutaro Soga, Shigeo Soga.^⑥

Conts Yamato Shimbun^⑦

Cont by Hawaii Times^⑦

Sakamaki, Union List^⑧

HSL mf, UHM mf^⑨

One of the 2 most influential general circulation Japanese language papers in this century (with Hawaii Hochi). Served to remind Island Japanese of their heritage and encouraged them to become good citizens in their new home. Soga was interned during World War II, and his son became editor. Special anniversary and New Year editions up to 60 pp....^⑩

(2) 概説書

199. 移民研究会編『日本の移民研究 動向と目録』日外アソシエーツ, 1994

<DC812-E190>

「第1部 研究史整理—II 日系人—受け入れと定着に関する諸問題—1 アメリカ合衆国本土—F ジャーナリズム」(pp.81-83)において、「邦字新聞」以外のメディアも含め、ハワイ・アメリカ本土の「日系ジャーナリズム」研究史を整理している。

455. 藤野雅己「北米における初期日系新聞をめぐる諸問題」『上智史學』32:1987. 11, pp.113-121

<Z8-473>

最初の活版日刊紙『新世界新聞』創刊(1894年, 明27)までの初期日系新聞に限定し、『第十九世紀』『愛国』『東雲雑誌』等の「史料」発見による新事実とそれに基づく研究を紹介し, 従来の説, 主に蛸原『海外邦字新聞雑誌史』(143)との異同及び今後の研究課題を整理する。

275. 太田勇「アメリカの民族新聞研究の動向と課題」『地理学評論』Ser. A, 65(9): 1992.9, pp.689-715 (文献: pp.711-713)

<Z8-571>

前掲, 『参考書誌研究』No. 52, pp.21-22, p.67参照。

211. 山田晴通「北米日系新聞関係日本語文献表(第1稿)」『松商短大論叢』42: 1994.3, pp.255-295

<Z3-287>

ハワイ・北米における日系新聞に関する邦語文献(含新聞記事)に, 簡単な説明を付したもの。1993年までの「日系新聞研究会」会員の研究成果をほぼ網羅す

る⁹⁾。山田は、「北米以外の日系新聞関係」「関係所在機関」を補足し、本文献表の加筆修正・文献追加をインターネット上で公開している (<http://www.camp.aff.tku.ac.jp/TOOL-BOX/NAJP.html>)。

143. 蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』學而書院, 1936 (附録: 海外邦人外字新聞雑誌史) (海外邦字新聞雑誌創刊改題年表: pp. 349-372) <UC126-11>

蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』名著普及会, 1980 (學而書院, 1936年刊の複製) <UC123-7>

東京帝国大学法学部附属「明治新聞雑誌文庫」(1981年, 法学部附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫と改称) 所蔵資料及び帝国図書館等の資料に拠り, 海外における邦字新聞・雑誌について網羅的に記述する⁹⁾。初期日系新聞・雑誌に関する古典的文献として, 多くの研究者の依拠・引用するところではあるが, 1980年代以降「日系新聞研究会」会員による実証的研究が進むにつれて, その「補足訂正を含めた全面的再検討」の緊要性が指摘されている¹⁰⁾。しかし, 1868年(明治元)から1926年(大正15)に及ぶ「海外邦字新聞雑誌創刊改題年表」等, その評価の如何に関わらず, また検証されるべき原点として, 現在もなお有用である。

456. 榊原亀之甫「アメリカの邦字新聞・今と昔」『総合ジャーナリズム研究』59: 1972.1, pp. 32-41 <Z6-8>

ハワイ・アメリカ本土の邦字紙の歴史及び現状について, 日系コミュニティ・紙面等の分析を交えながら概観する。榊原は当時『北米毎日新聞』東京支局長。

457. 「聴きとりでつづる新聞史 海外編 I」『別冊新聞研究』9: 1979.10 <Z21-670>

458. 「聴きとりでつづる新聞史 海外編 II」『別冊新聞研究』17: 1983.12

<Z21-670>

日系新聞関係者からの「聴きとり」による日系新聞史。聞き手は春原昭彦及び高須正郎¹¹⁾。「海外編 I」には, サンフランシスコ (『日米新聞』『日米時事』—浅野七之助/池添一馬/梅津孜, 『北米毎日新聞』—ハワード今関/吉次茂生)・ロサンゼルス (『羅府新報』—駒井明/橋田悌穂/佐藤鉄雄, 『加州毎日新聞』—菱木寛/丸谷潤子)・ハワイ (『ハワイ報知』—山本常一, 『日布時事』『ハワイタイムス』—平井隆三)を, 「海外編 II」には, ニューヨーク (『北米新報』『ニューヨーク日米新聞』—貴田愛作)・メキシコシティ・リマ・海外日系放送 (ロサンゼルス「朝日ホームキャスト」, 「ユナイテッドテレビ」, ハワイ「キクテレビ」ほか)を収録する。なお, 「海外編 III」『別冊新聞研究』19: 1985.4は, サンパワロ及びプエノスアイレスの日系新聞関係者を収録している。各氏談話を理解するためのバックグラウンドとして, 各地域日系紙の発展略史を付している。

○「海外編 I」(全て春原昭彦記): 「サンフランシスコ日系紙の歩みと現況」
「ロサンゼルスの日系紙の変遷と発展」「ハワイの日系紙その生い立ちと活動」

○「海外編 II」(全て高須正郎記): 「ニューヨーク日系紙の変遷と発展」「南

北アメリカで発展する日系放送]

- 「海外編Ⅲ」（全て高須正郎記）：「ブラジルの日系新聞その変遷と苦闘」
「アルゼンチンの日系紙戦前からの歩みと役割」

459. 田村紀雄・白水繁彦「在米日系新聞の発達史研究序説」『東京経済大学人文自然科学論集』61：1982.9, pp. 33-90 <Z22-394>

「日系新聞研究会」の研究プログラムの問題意識（問題の所在・研究の動機・研究の領域）を整理する。「日系人」「日系社会」「日系新聞」等主要概念を定義・整理し、「日本の移民新聞研究」「日系新聞の発達略史」「日系新聞の現状・問題点・将来」等を概観する。各種の文献から採取したアメリカ（含むハワイ）とカナダの日系新聞の「不完全」な事例として約200タイトルの日系新聞をリスト・アップしている（pp. 35-40）。

460. 白水繁彦「変わりゆく北米の日系新聞」『新聞研究』377：1982.12, pp. 58-63 <Z21-88>

日系新聞を「比較的大規模な日系新聞」「オーソドックスな日系新聞」「新しい傾向の日系新聞」「市民運動型の新聞」の四カテゴリーに類型化し、経営・紙面・日系社会の分析を通して、「日系新聞の新しい展開」を探る。

144. 田村紀雄・白水繁彦編『米国初期の日本語新聞』勁草書房、1986（北米初期日系新聞関係年表：pp. 435-453） <UC151-9>

「日系新聞研究会」最初の共同研究論文集。「米国の日系新聞の発達と日本の知識人」をテーマに開催された国際シンポジウム（1984年11月、於：東京経済大学）での報告・検討を基に新たに書き起こされたもの。1886年（明19）—最初の日本語新聞『東雲雑誌』創刊—から1924年（大13）—「排日移民法」制定—頃までの「米国・初期の日本語新聞」を対象とする。本書の刊行により、蛭原『海外邦字新聞雑誌史』（143）以来50年の空白が埋められ、日系新聞研究は本格的・実証的研究の段階へ入ったという意味で、評価が高い¹²⁾。「北米初期日系新聞関係年表」が蛭原「海外邦字新聞雑誌創刊改題年表」北米部分をまず補足・訂正するもの。小玉「シンポジウムの視角」が、本シンポジウムの視座—日系新聞と「知識人」—について、収録論稿を踏まえて整理、問題点を指摘し総括する。以下の各論稿を収録。

田村紀雄「概説 初期の米国日系新聞の流れ」／阪田英雄「脱亜の志士と閉ざされた白哲人の楽園—民権派書生と米国に於ける黄色人種排斥」／ユージ・イチオカ「安孫子久太郎—永住を主唱した米日日本人先駆者」／新井勝敏「自由民権期の渡米邦人活動史（序）」／有山輝雄「雑誌『遠征』の言論活動—一八九〇年代サンフランシスコにおける「有志」の軌跡」／白水繁彦「ハワイ日系新聞人の適応のストラテジー」／蒲池紀生「ニューヨークにおける星—の新聞・雑誌活動」／伊藤一男「米国西北部の帰国知識人」／「明治を超えて」＊関口英男「杉町八重充—一九一九—一九六七」＊藤野雅己「中島半三郎と『在米体験』—自由民権運動と労働問題」＊サエキ、バリー・山本英

政「二世の立場から」／小玉美意子「シンポジウムの視角」／田村紀雄「共同研究の方法論—『あとがき』にかえて [含資料]」

461. 田村紀雄「概説 初期の米国日系新聞の流れ」田村・白水編『米国初期の日本語新聞』1986, pp. 1-45 <UC151-9>

459. 田村・白水論文から462. 田村書へと発展する過程での纏め。日系新聞研究における理論的・思想的前提としての基本的視座を検討し、^{サンフランシスコ} 桑 港・^{ロサンゼルス} 羅 府・^{シアトル} 沙 港・^{ハワイ} 布 哇・^{ニューヨーク} 紐 育・その他の都市の日系紙発達を概観する。『米国初期の日本語新聞』(144) 所収各論稿への導入的概論であるとともに、この時期において、^{シカゴ} 蛭原『海外邦字新聞雑誌史』(143) を補足・訂正する文献の一つとして重要である。

462. 田村紀雄『アメリカの日本語新聞』新潮社, 1991(新潮選書) <UC151-E5>

海外で初めて発行された邦字紙『東雲雑誌』から太平洋戦争後の日系紙の「奇跡の復興」まで、日系コミュニティにおける「都市の装置」としての日本語新聞一世紀の消長を綴る。物語風の文体のなかにも、これまでの研究成果がふんだんに盛り込まれ、アメリカにおける日系新聞に関する、最適な入門書となっている。

463. 田村紀雄編著『正義は我に在り 在米・日系ジャーナリスト群像』社会評論社, 1995 <UC151-G1>

「日系新聞研究会」三冊目の共同研究書。アメリカにおける排日・労働運動等をめぐって展開された、日系新聞・日本人ジャーナリストの言論とアメリカ側の対応の「社会的プロセス」を主な課題とする。日本人ジャーナリストの生き様を伝えるとともに、アメリカにおける個別の日系新聞の発達過程が詳述される。些末ながら、少なからず誤植があることが惜まれる。以下の論稿を収録する。

飯田耕二郎「ハワイ・日系キリスト教会の草創期の機関紙」／田村紀雄「ポートランドの新聞事情と伴三郎」／田村紀雄「海を渡った田中正造直訴ニュース」／山本英政「^{あゆりか} 亜米利加丸事件—触診検査は凌辱的だったのか」／阪田安雄「『加州毎日新聞』と藤井整の周辺」／田村紀雄「一九二〇年耕地ゼネストと『洋園時報』」／有山輝雄「一九二四年移民法と『羅府新報』」／林かおり「『羅府新報』と愛国運動」／山中速人「日本語学校『試訴』事件と日系新聞」／ウエスリー・ウエウンテン「ハワイの日系二、三世と『ハワイ・ヘラルド』」／田村紀雄「反ファシズムの新聞『同胞』」

464. 田村紀雄・東元春夫「移民新聞と同化—『ユタ日報』の事例を中心に [含資料]」『東京経学会誌』138: 1984. 11, pp. 183-218(日系新聞研究ノート 6)

<Z22-393>

465. 東元春夫「移民新聞の盛衰と同化に関する一考察—『羅府新報』の場合」『新聞学評論』36: 1987. 4, pp. 43-56 <Z21-85>

466. 東元春夫「移民新聞購読と同化のレベルに関する一考察—在米日系人の調査から」『芦屋大学論叢』19: 1990. 6, pp. 131-157 <Z22-978>

464-466は、東元のブリガム・ヤング大学での学位論文 “Assimilational Fac-

tors Related to the Functioning of the Immigrant Press in Selected Japanese Communities (Utah, California).” (ph. D., 1984) を敷衍させた一連の論稿。アメリカにおける移民新聞研究の通説となっているM・ジャンヴィッツ Morris Janowitz の仮説（移民新聞が長く存在すればするほど、①発行頻度は少なくなる。②発行部数は減少する。）を、「米国社会への同化に最大の抵抗を示してきた」日系人コミュニティを事例に分析し、その妥当性を検証する¹³⁾。

464では、カリフォルニア等西海岸諸州とは異なった日系コミュニティ環境が存続した、モルモン教の聖地ソルトレークシティにおいて、戦時中も発行され続け、また資料の散逸を免れた『ユタ日報』を対象とし、465では、創刊以来発行部数が増加し続けている『羅府新報』を対象として、ジャンヴィッツの仮説を検証する。『ユタ日報』事例では、発行部数の減少と日系人口の漸増により、『羅府新報』事例では、発行部数の増加にもかかわらず、その対人口比での減少によって、ジャンヴィッツ仮説の妥当性を裏付け、「移民新聞の機能（同化）と逆機能（衰退）の普遍性」を示唆する。466は、「同化の指標」（①所属集団の数 ②職場の同僚との関係 ③近隣関係 ④友人のエスニシティ）を設定し、「送り手」側（新聞）ではなく「受け手」側（読者）についてのサンプリング調査によって、「個人の同化のレベルが高いほど移民新聞購読の傾向が小さくなる」という仮説の妥当性を実証する¹⁴⁾。また464論稿は、ユタ州における日本語新聞事情についても略述する。

467. 白水繁彦編著『エスニック・メディア 多文化社会日本をめざして』明石書店、1996(在日エスニック・メディア カタログ'96：巻末, pp. i-xxviii)

<UC126-G5>

通信系を含む「在日」エスニック・メディアの現状に関する初めての纏め。日系コミュニティにおける日本語メディアの発展過程を考えるうえで、比較・参照されるべきであろう¹⁵⁾。

468. 白水繁彦『エスニック文化の社会学 コミュニティ・リーダー・メディア』日本評論社、1998

<EC131-G15>

「エスニック集団の変化とメディア」に関するこれまでの論稿を大幅に加筆修正し、著者の研究軌跡を踏まえて、「海外の日系人」に関するものと「日本国内のエスニック集団」に関するものに大別、再編する。「I 協調か抵抗か：抑圧下の一世リーダーのストラテジー」(pp. 2-26/後掲480)「ハワイ日系新聞人の適応のストラテジー」田村・白水編『米国初期の日本語新聞』に加筆修正)は、「日本語学校試訴事件」をケースとして、牧野金三郎(試訴派・『布哇報知』)と相賀安太郎(反試訴派・『日布時事』)二人のコミュニティ・リーダーの適応のストラテジーを明らかにし、その背後にある「構造的文化的志向」を探る。「V 『エスニシティとメディア』：日本における研究の系譜」(pp. 116-127/「エスニシティ」『マス・コミュニケーション研究』50：1997.1(現代マス・コミュニケーション理論のキーワード<特集>))に加筆)は、「エスニック・メディア研究の

開始：シカゴ学派の影響」「海外日系新聞の歴史的研究の系譜」「在日エスニック・メディアの研究」「グローバリゼーション、民族イメージ」それぞれの研究史概観。「VI 在日エスニック・メディアの現在」(pp.129-158/「エスニック・メディアの現在」白水編著『エスニック・メディア』に新データを加え修正)は、在日エスニック・メディアの内容・社会的機能についての概説。

469. 町村敬志「エスニック・メディアのジレンマ—ロスアンジェルス日本系メディアを事例に」奥田道大編著『都市エスニシティの社会学—民族／文化／共生の意味を問う』ミネルヴァ書房, 1997, pp.123-142 (都市社会学研究叢書 7)

<EC121-G25>

エスニック・メディアを、その役割によって「移民メディア」「マイノリティ・メディア」「越境者メディア」の三類型に分け、日系メディアからアジア系アメリカ人メディアへと志向する『羅府新報』等、ロサンゼルス日本語「移民メディア」の盛衰を例に、エスニック・メディアの孕む「グローバル」と「ローカル」という両義性を実証する。エスニック・メディアの究極的な課題として、インターネット上の電子ジャーナリズムにおける「移動者の新たな公共圏形成の可能性」を提起する¹⁶⁾。

470. 町村敬志『越境者たちのロスアンジェルス』平凡社, 1999(平凡社選書 190)

<DC821-G20>

多人種都市ロサンゼルスにおける日系コミュニティの変遷のなかで、「越境者」としての日系人・日本企業駐在員と日系紙等日本語メディアの関係を考察する(「第5章 遠隔地『日本』社会の構造—まつわりつくナショナリティ」pp.209-254)。(「第3章 交錯する場所、重層する記憶—アフリカ系アメリカ人と日系アメリカ人」pp.109-161は、「越境者」と「エスニック」という概念を手懸かりに、黒人と日系人との共存関係を描く。)¹⁷⁾

471. 藤岡伸一郎「海外邦字新聞の現状と課題 第一回・世界日本語新聞代表者会議開催さる(上, 下)」『総合ジャーナリズム研究』71: 1975.1 pp.149-156, 72: 1975.4 pp.123-135

<Z6-8>

第1回「世界日本語新聞代表者会議」(1974年10月, 於: 経団連ホール)に参加した5ヶ国15社(ハワイタイムス・ハワイ報知・日米時事・北米毎日新聞・羅府新報・加州毎日新聞・北米報知・シカゴ新報・大陸時報・ペルー新報・サンパウロ新聞・パウリスタ新聞・日伯毎日新聞・らぶらた報知・亜国日報各社)の現状と問題を探る。

この会議において、海外マスコミと日本の新聞界との交流・海外マスコミ相互の連絡をはかり、日系社会の発展に寄与する目的で「海外日系新聞協会」が設立された。以後、「日本新聞協会」の新聞大会開催に合わせて、「海外日系新聞協会年次大会(海外日系新聞大会)」が例年開催されている¹⁸⁾。

472. 田村紀雄「国産技術の海外移転—アメリカ日系社会の場合」田村紀雄・志村章子編著『ガリ版文化史 手づくりメディアの物語』新宿書房, 1985, pp.240-

243 (ガリ版印刷文化関係年表: pp. 251-259, ガリ版文化史参考文献: pp. 260-263) <PE23-6>

アメリカ日系社会におけるガリ版印刷についての簡単な纏め。このような視点からの研究もあるという好例であろう。印刷技術については、個々の研究で触れられているものも少なくないので、日系新聞の印刷技術について今少し詳細な纏めも期待される¹⁹⁾。

(3) 新聞人の評伝・研究論文

【ハワイ】

① 小野目文一郎: 1863(文久3)-1906(明39)

仙台藩士族の出。仙台中学校の同級生に「愛国同盟」の民権運動家菅原伝がいる。1886年(明19) 布哇移住民局移民監督官として渡布。移住民局の日本人移民の扱いに義憤を覚え辞職、これを攻撃・批判するために、1892年(明25) 6月3日、ハワイ初の日本語新聞『日本週報』を創刊した。一方で「小野目商店」「蚕糸銀行」等の事業も試みた²⁰⁾。

473. 坪井みゑ子『ハワイ最初の日本語新聞を発行した男』朝日新聞社, 2000

<GK115-G46>

現存した『日本週報』との出会いを頂点に、知られざる「ハワイの叔父さん」小野目文一郎の生涯を15年間にわたり探し求めた、「主婦のナゾ解きの旅」の記録。「現物は残っていない」(462. 田村『アメリカの日本語新聞』1991, p. 167)と言われた『日本週報』の、第35号(1893年2月6日発行、「ハワイ州立公文書館 *Hawaii State Archives*」所蔵)の紹介は、ハワイの初期日系新聞研究の難しさを象徴するものである²¹⁾。

② 奥村多喜衛: 1865(慶応元)-1951

安芸郡奉行奥村又十郎の長男として高知県田野町に生まれる。同志社神学校卒業後、1894年(明27) ホノルル日本人基督教会(ヌアヌ教会)宣教師として渡布。以後ハワイ日系社会の伝導・教育・矯風、日米問題解決(「排日予防啓発運動 *Educational Campaign among Japanese Labor on Various Plantations*」の展開(1921-30年)、「日系市民会議 *New Americans Conference*」の開催(1927-41年)等に尽力し、ハワイ在留邦人の地位向上に努めた。キリスト教の博愛不偏を標榜する『ほのる・新聞』(1900年12月12日創刊)に関与、また米化運動の機関紙として、1919年1月、『楽園時報』(『愛友叢誌』→『マキキ教報』→)を発行した。奥村が関与したいわゆる「キリスト教ジャーナル」は、ホノルルの「マキキ聖城基督教会」にほぼ完全に保存されている²²⁾。

342. Kotani, Roland. *The Japanese in Hawaii: A Century of Struggle*. Honolulu: Hawaii Hochi, 1985. (Bibliography: pp. 165-169)

<DC812-A30> <移-Y2>

‘Chapter 4 Okumura, Makino and the Japanese Community’ (pp.47-63) において、日本人コミュニティの二大指導者、「サムライ牧師 *Samurai Reverend*」奥村多喜衛と「(白人との) 混血煽動家 *Hapa-Haole Agitator*」牧野金三郎の対照的な生き方を、「ストライキ問題」(1909年：日本人大大ストライキ—1920年：オアフ島大ストライキ)、「日本語学校試訴事件」(1922-27年)、及び「米化」への対応等を通して描写する²³⁾。

474. 杉井六郎「排日予防啓発運動」同志社大学人文科学研究所「海外移民とキリスト教会」研究会編『北米日本人キリスト教運動史』PMC出版, 1991, pp. 69-147

<HP77-E17>

奥村の『布哇に於ける日米問題解決運動』を主な典拠とし、奥村多喜衛・梅太郎父子がハワイにおいて展開した「排日予防啓発運動」の足跡とその役割を検証する。

475. 島田法子「奥村多喜衛と渋沢栄一—日米関係からみたハワイにおける排日予防啓発運動」『日本女子大学紀要 文学部』43：1994.3, pp.39-56 <Z22-535>

1920年代に高まったハワイにおける「排日運動」解決のため、奥村が展開した「排日予防啓発運動」の背景には、日本の指導者層の協力があつた。移民問題解決を「国益」とする渋沢栄一と奥村の関係を、日米関係の文脈の中で考察し、「米化運動」の歴史的意義を再評価する。

476. 吉田亮「キリスト教化とハワイ日系人のアメリカ化—奥村多喜衛と日系市民会議」『宗教研究』67(1)：1993.6, pp.79-103(民族と宗教<特集>) <Z9-184>

奥村は、将来のハワイ日系社会を担う二世指導者の養成を目的に、「排日予防啓発運動」の展開と並行して「日系市民会議」を主催した。本稿は、奥村の「米化運動」をケーススタディとし、『樂園時報』等の「キリスト教ジャーナル」に拠り、キリスト教が、「新武士道」として、ハワイ日系社会の「米化」「同化」に果たした役割を検討する²⁴⁾。

477. 中川美佐著、物部ひろみ [ほか] 訳『土佐からハワイへ—奥村多喜衛の軌跡』「奥村多喜衛とハワイ日系移民展」実行委員会, 2000(奥村多喜衛の経歴：pp.176-178, 大久保清の経歴：pp.179-180, 主な参考文献：pp.181-183) (英文併記)

<HP113-G88>

『高知新聞』に1998年12月23日から65回にわたって連載されたものを纏め、英訳を付したもの。この取材過程で「奥村多喜衛とハワイ日系移民展—土佐からハワイへ」(2000年3月25日-5月7日、於：高知市立自由民権記念館)の開催が決定された(本書「奥村多喜衛とハワイ日系移民展」pp.170-175)。高知時代から1951年の昇天まで奥村の軌跡の全貌を明らかにする。

③ 林三郎：1867(慶応3)-1943

福島県会津若松に生まれる。「会津の役」敗北後、1870年(明3)一家は他の会津藩士とともに陸奥国斗南藩に移住した。1884年、青森県立医学校を主席で卒業し、

1885年渡米。1888年、ハネマン医科大学（サンフランシスコ）に入学、苦学をしながらも1891年主席で卒業した。この間知り合った岡部次郎牧師の要請で、1892年ハワイ島ホノムで開業し、その後コナに移り住んだ。医業の傍ら、日本語学校の創設等多くの社会事業にも寄与、コナの日本人を啓発する目的で、1897年(明30)2月13日、ハワイ島で初めての日本語新聞『コナ反響』を創刊した。『コナ反響』は、戦争による発行停止の後、J.B. Dixonにより再刊されたが(1950年4月、'Kona Echo')、林の『コナ反響』とは別の新聞と考えるべき²⁵⁾。²⁶⁾

478. Nakano, Jiro. **Kona Echo : A Biography of Dr. Harvey Saburo Hayashi.**
Kona : Kona Historical Society, c 1990. (References : pp.105-107)

<移(四)-Y43>

479. 中野次郎『ジャカラダの径 ハワイの医師林三郎伝』中野好郎, 1991 (478.
Kona Echo. の翻訳) <GK49-G7>

「コナの経済的、社会のおよび文化的進歩に貢献した最大の先駆者」林ハービ
イ三郎の生い立ちから晩年までを克明に描く。著者中野は当時、ヒロ在住の医師
で、『Japanese Beach Press』に日系移民史を含む随想「ハワイ島便り」を連載
していた(「コナ・エコー(反響)」『Japanese Beach Press』1993年8月13-26
日号)。この連載記事からハワイアンのマナ(情念)とハワイアーナ(風物詩)
を伝えるものを選び『ハワイ・マナ 楽園の風物詩』集英社, 1996 <GJ123-G2>
として纏めている²⁷⁾。

④ 相賀安太郎 : 1873(明6)-1957

「代々大江戸に住んでいた碌々たる平和の小市民の家」に生まれる。東京法学院
(現、中央大学)及び東京薬学校中退、この間職を転々とす。志保澤忠三郎(1894
年、『布哇新報』創刊)の招きで1896年(明29)渡布。『布哇新報』の編集者兼記者
兼製版工として働く。1905年5月、『やまと新聞』を譲り受け編集方針を一新させ
た。翌年11月3日、『やまと新聞』は『日布時事』と改題(1942年11月『布哇タイム
ス』と改題)、相賀は社長兼主筆として、『布哇報知』(1912年創刊)牧野金三郎とと
もに、ハワイ日本人コミュニティを二分する指導者として、在布同胞の啓蒙活動を
展開した。戦争中はサンタフェ収容所に抑留された。溪芳と号し筆硯に親しむ²⁸⁾。

320. 相賀溪芳『五十年間のハワイ回顧』 Honolulu, 「五十年間のハワイ回顧」刊行
会, 1953(ハワイ日本人年表 : 巻末, pp.1-6)

<334.476-So624g> <山本-201> <移-13>

新聞人の当然の職域・責任として、また将来の参考にあ資するため、相賀自身の
渡布(1896年)から終戦直後(1946年)まで、日本人移住の由来、発展の道程及
び日米関係の真相を記録する(前掲、『参考書誌研究』No.52, pp.33-34参照)。

342. Kotani, Roland. **The Japanese in Hawaii : A Century of Struggle.** Hawaii
Hochi, 1985.²⁹⁾ <DC812-A30> <移-Y2>

480. 白水繁彦「ハワイ日系新聞人の適応のストラテジー」田村・白水編『米国初期

『日本語新聞』1986, pp. 279-310

<UC151-9>

468. 白水繁彦「協調か抵抗か：抑圧下の一世リーダーのストラテジー」白水『エスニック文化の社会学 コミュニティ・リーダー・メディア』1998, pp. 2-26

<EC131-G15>

⑤ 牧野(フレッド)金三郎：1877(明10)-1953

英国人貿易商 Joseph Higgenbotham を父に横浜で生まれる。4歳の時父が死亡、義父との折り合いが悪く、1899年(明32) 渡布。長兄牧野讓経営の商店をはじめ、精糖会社・耕地会社等で帳簿係を勤める。その後ホノルルで「牧野薬舗」を開業、「牧野法律事務所」なるものを併設し、日本人移民の面倒もみた。1909年、第一次オアフ島ストライキ時には「増給期成会 *Higher Wage Association*」会長に推され、後にライバル紙となる『日布時事』社主・相賀安太郎らとともに投獄された。在留同胞の権益擁護のためには邦字新聞が必要であることを痛感し、1912年(大正元)12月7日、「不偏不党独立不羈」を社是に『布哇報知』(→『ハワイ報知』)を創刊。その後幾多の事件・事案において敢然たる論陣を展開した。

481. 牧野金三郎伝編纂委員会編『牧野金三郎伝』ホノルル, 牧野道枝, 1965(英文併記) <289.1-M157> <山本-189> <移-78>

「業績概略の敷衍」(pp. 24-37), 「日本語学校の試訴苦闘史」(pp. 38-64), 「福永事件と助命運動」(pp. 65-67) 等同胞の権益擁護のために戦った牧野金三郎と『布哇報知』の寄与した功績, 「逝去と葬儀概略」(pp. 87-97) 及び関係者の回想を纏める追悼出版。

342. Kotani, Roland. *The Japanese in Hawaii: A Century of Struggle*. Hawaii Hochi, 1985. ²³⁾ <DC812-A30> <移-Y2>

「福永事件」につき 'Chapter 5 The American Dream' (pp. 65-78) も参照のこと。

482. 『フレッド牧野金三郎氏の伝記』[ホノルル, ハワイ報知社, 1987] (英文併記)

<移(四)-102>

『ハワイ報知』創立75周年を記念して発行されたパンフレット。「生い立ち」「第一回日本人ストライキ」「『ハワイ報知』創刊」「『報知』を通じての牧野の貢献」「戦争中と戦後の牧野とその死」「牧野のもう一つの面」を7頁(日本語頁)に収める牧野金三郎略伝。渡辺礼三編『ハワイ報知創刊七十五周年記念誌』ハワイ報知社, 1987<UC171-E6ほか>は、『布哇報知』(→『ハワイ報知』)の記事・論説を中心に、ハワイ邦人社会における牧野の功績を辿る。併せて参照されたい。

480. 白水繁彦「ハワイ日系新聞人の適応のストラテジー」田村・白水編『米国初期の日本語新聞』1986, pp. 279-310 <UC151-9>

468. 白水繁彦「協調か抵抗か：抑圧下の一世リーダーのストラテジー」白水『エスニック文化の社会学 コミュニティ・リーダー・メディア』1998, pp. 2-26

⑥ 大久保清：1905(明38)～

材木商大久保長二郎の三男として、新潟県北蒲原郡加治村に生まれる。1924年(大13) 渡布、『布哇新報』記者、「布哇中央学院」(奥村多喜衛創立)日本語教師を経て、1928年から林三郎の『コナ反響』編集を手伝う。その後も『電波新聞』(ホノルル)記者、『布哇報知』ヒロ支局長として新聞界に身を置く。1955年、一世のための最後の日本語新聞『ヒロタイムス』を創刊、1965年には「ハワイ島日本人移民資料館」を開設した。95歳の今もなお、ヒロのラジオ局「KIPA」のパーソナリティを勤めるハワイ最後の新聞人、ジャパン・ボーン(日本生まれ)のマクレ(年寄り)である²⁹⁾。

483. 朱鷺谷ゆみ「ワシはジャパン・ボーンのマクレジャー頑固一徹の明治男が語る
ハワイ日系社会の礎」『ハワイ【極楽】読本 その先の「樂園」へ』宝島社, 1997,
pp. 224-227(別冊宝島 WT 15) <未所蔵>

484. 須藤達也「ハワイの日系新聞人一大久保清のこと」『朱夏』11: 1998. 10, pp. 59
-68(内と外のジャーナリズム<小特集>) <Z13-4340>

477. 中川英佐, 物部ひろみ[ほか]訳『土佐からハワイへー奥村多喜衛の軌跡』[奥村
多喜衛とハワイ日系移民展]実行委員会, 2000(奥村多喜衛の経歴: pp. 176-
178, 大久保清の経歴: pp. 179-180, 主な参考文献: pp. 181-183)(英文併記)
<HP113-G88>

「ハワイ島日本人移民資料館」長・大久保清との出会いにより、著者の奥村多喜衛研究が触発された。本書は、最後の新聞人大久保と「ハワイ島日本人移民資料館」について初めて「本格的に」紹介する(「第二部 大久保清」(pp. 147-169))。

【アメリカ本土】

① 鷺津尺魔(鷺頭文三)：1865(慶応元)-1936

新潟県三島郡飯塚村に酒造業鷺頭源次の三男として生まれる。自由党の活動を経て、1894年(明27) 渡米。『桑港新聞』の筆耕生を皮切りに、『臆はづ誌』『太平洋』『ジャパン・ヘラルド』(→『桑港日本新聞』→『日米新聞』『新世界』等々多くの新聞・雑誌の創刊に関わり、記者として健筆を揮う一方で、「日本勸業社」(社長・安孫子久太郎)等実業にも関わった。鷺津の『日米新聞』連載記事「歴史湮滅の嘆」「吾輩の米國生活」等は、当時の日系社会及び新聞界の事情を伝える貴重な資料である。『在米日本人史観』<DC812-188>(後掲)が唯一の纏まった著作。

388. 佐渡拓平『カリフォルニア移民物語 気骨のジャーナリスト尺魔が刻した』亜紀書房, 1998(年表(「鷺津尺魔」「アメリカにおける日本人排斥等」関連): pp. 283-285, 主な参考文献等: 巻末pp. 1-3) <DC812-G107>

「第六章 安孫子久太郎と尺魔」(pp. 211-247)は、「鷺津なくして安孫子なし、安孫子なくして鷺津なし」という畏友二人の関係を描く。

② 横川省三：1865(慶応元)-1904(明37)

南部藩士三田村勝衛の次男として盛岡に生まれる。幼名は勇次。19歳の時、徴兵を忌避するため入婿して横川姓となる。自由民権運動に参画し、「加波山事件」で投獄。1890年(明23)『東京朝日新聞』社入社、郡司大尉の北千島探検同行記事、日清戦争海軍従軍記者としての威海衛夜襲実見記、三陸沖大津波実見記等々、横川の名記事が紙面を飾った。1896年退社し翌97年渡米。鷺津尺魔らと『ジャパン・ヘラルド』(→『桑港日本新聞』→『日米新聞』)を創刊した。ハワイで「熊本移民合資会社」代理人を経た後、日露戦争時、いわゆる「露探」として、東清鉄道爆破の秘命を帯び潜伏中、発覚し処刑された。その潔い最期が後々まで語り伝えられている。³⁰⁾

485. 関口英男「アメリカにおける横川省三 —1— 邦字新聞編集者としての事蹟」『帝京経済学研究』18(1・2)：1984.12, pp.353-366 <Z3-831>

関口英男「アメリカにおける横川省三 —2— 自由民権運動に占める邦人新聞の意義」『帝京経済学研究』19(1・2)：1985.12, pp.235-259 <Z3-831>

自由民権運動、東京朝日新聞記者時代を経て渡米。その背景及び『桑港日本新聞』(『ジャパン・ヘラルド』→)創刊の経緯を、海外初の邦字紙『東雲雑誌』発見とロサンゼルス自由民権派新聞の消長のなかに跡づけ、ハワイでの恵まれた生活から満州行へと、自由民権運動の激動期に「私」から「公」へと奉じた横川の事蹟を検証する。

③ 安孫子久太郎：1865(慶応元)-1936

新潟県北蒲原郡水原町に生まれる。生後7日で母と死別、母方の祖父安孫子胎堂のもとで養育され、蠟燭や紙の行商を手伝う。17歳の時、「徒手空拳」を振るうべくアメリカを目指し離郷。志し達せず、東京で数年間を過ごす。この間、仏学塾(中江兆民)・漢学塾(三島三洲)・英学塾(矢野文雄)に学び、1883年(明16)には京橋区肴町教会で洗礼を受けている。1885年、20歳の時、サンフランシスコ福音会の修学生として渡米、書生として働く。『ジャパン・ヘラルド』(→『桑港日本新聞』)及び『北米日報』(「ハイト青年会」機関紙)を買収・合併し、1899年『日米新聞』を創刊。その成功・興隆とともに、安孫子は「新聞事業家」として、排日運動批判・「土着永住論」の展開等その理想像を追求した。「ヤマト・コロニー」(1906年建設)をはじめとする3ヶ所の理想郷は今日も存続している³¹⁾。余奈子夫人は、津田梅子の末妹で、安孫子の死後も、戦争による停止の日まで『日米新聞』を発行し続けた^{32) 33)}。

486. 村山有「安孫子久太郎 排日移民法と戦う」『続・越佐が生んだ日本の人物』新潟日報社、1965, pp.310-332 <281.41-N693e2>

村山有「安孫子久太郎 排日移民法と戦う」『越佐が生んだ日本の人物』新潟日報事業社出版部、1994, pp.310-332 (第1集-第3集, 昭40-42年刊の合本複製)

<GK13-E832>

郷土の先人、安孫子久太郎の家庭環境及び渡米前後の事情を関係者に語らせ、

『日米新聞』における米化運動・排日運動への対応、理想郷「大和殖民地」^{ヤマトコロニー}建設の経緯について叙述する。安孫子の幼年時代に関する数少ない記録を含む略伝である。

487. Ichioka, Yuji.[ほか]「安孫子久太郎—永住を主唱した『日米』新聞経営者〔含資料〕」『東京経済大学人文自然科学論集』68：1984.12, pp.61-96(在米日系新聞の発達史研究 7) <Z22-394>

明治30年代サンフランシスコの日本語新聞事情を序に、安孫子の渡米時代、企業家としての成功、『日米新聞』経営、排日問題への対応、「永住論」と二世問題等を考察する³⁴⁾。「ヤマト・コロニー」及び『日米新聞』の源流の一つである『ジャパン・ヘラルド』についても概観する。

488. ユージ・イチオカ「安孫子久太郎—永住を主唱した在米日本人先駆者」田村・白水編『米国初期の日本語新聞』1986, pp.195-231 <UC151-9>

上掲487論文の、イチオカ執筆部分を大幅に加筆修正して、再編したもの。

④ 河上清：1873(明6)-1949³⁵⁾

489. 古森義久『嵐に書く 日米の半世紀を生きたジャーナリスト』毎日新聞社, 1987(河上清の日本語の主要著書, K・K・カワカミの英文の著書：p.286, 主要な参考文献：pp.287-289) <GK73-132>

古森義久『嵐に書く 日米の半世紀を生きたジャーナリスト』講談社, 1990(河上清の日本語の主要著書, K・K・カワカミの英文の著書：pp.341-342, 主要な参考文献：pp.342-346)(講談社文庫) <GK73-E40>

「嵐に書く K. K. カワカミと日米の半世紀」と題し、1986年4月10日から10月25日まで161回にわたり『毎日新聞』に連載されたものを加筆修正。「情報公開法」に基づいて開示された、FBI・陸海軍当局等アメリカ政府当局資料も使用し、「国際ジャーナリスト」河上清の激動の生涯を日米関係を背景に描く。

⑤ 星 一：1873(明6)-1951

磐前県(のち福島県に合併)江栗村に生まれる。「開明的」な父、喜三太の下で育ち、12歳で小学校教師となった。1891年(明24)東京商業学校に入学。スマイルズ『西国立志伝』(中村正直訳)を座右の書とし、1894年渡米。サンフランシスコで、スクールボーイとして、安孫子久太郎の福音会宿泊所を居とした。ここで生涯の事業パートナー安楽榮治と知り合う。1899年、コロンビア大学在学中、『日米週報』(→『日米時報』)を創刊。1901年コロンビア大学卒業後、同年8月、英字誌‘Japan & America’を創刊するが経営悪化。1906年、『日米週報』を共同経営者安楽に譲り、‘Japan & America’を廃刊し、「マスター・オブ・アーツ」の学位を携え日本に帰国。帰国後は、「星製薬」を創業し(1910年)、チェーン店制を導入、特約店子弟の教育のため「星製薬商業学校」(現、星薬科大学)を設立した。政界にも進出したが(1946年参院選では最高得票当選)、1951年ロサンゼルスで客死した。星の死後、

会社は長男親一（のち、作家・星新一）に引継がれたが、結局倒産した。³⁶⁾

490. 大山恵佐『努力と信念の世界人 星一評傳』共和書房, 1949 <289.1-H6860h>
大山恵佐『努力と信念の世界人 星一評傳』大空社, 1997 (伝記叢書 262) (共和書房, 1949年刊の複製) <GK53-G42>
星の記憶を基に、「失敗の人」星一の努力を、誕生から死去の一年前まで、81のトピックで記録する「聞き語り」。星の生涯を通しての唯一の評伝であり、星一に関する基本文献となっている。
491. 蒲池紀生「ニューヨークにおける星一の新聞・雑誌活動」(144) 田村・白水編『米国初期の日本語新聞』1986, pp. 311-325 <UC151-9>
主に上掲490. 大山書及び前掲360. 紐育日本人会編『紐育日本人発展史』<398-3>(444『日本人海外発展史叢書』に復刻・収録<DC812-213>)を典拠として、「星一の生涯」「ニューヨークなどでの新聞・雑誌活動」「帰国後の星とジャーナリズムの活動」について纏める。

⑥ 渋谷清次郎・駒井豊策・藤岡紫朗・坂井米夫

492. 林かおり『日系ジャーナリスト物語 海外における明治の日本人群像』信山社出版, 1997 (主要参考文献: pp. 283-287) <UC151-G4>
渋谷清次郎³⁷⁾・駒井豊策³⁸⁾・藤岡紫朗³⁹⁾・坂井米夫⁴⁰⁾の『羅府新報』関係者に、移民史を彩るテーマ(渋谷「脱亜入欧」・駒井「徒手空拳」・藤岡「忠誠登録」・坂井「錦糸帰郷」)をサブプロットとして設定し、アメリカにおける四人の一世の軌跡を辿る。『羅府新報』に「心・わが町 羅府新報を生きた人々」として1996年春から71回にわたり連載されたもの。

⑦ 藤井整: 1882(明15)-1954

山口県周東町に生まれる。1911年(明44) 南カリフォルニア大学法学部卒業, その後一時帰国して八幡製鉄所に勤務。1913年再渡米, リトルトーキョー(ロサンゼルス)を本拠地に日系社会指導者の一人として活躍し, 南加中央日本人会幹部の勢力争いを遠因とする「密航者密告事件」では、『羅府日米新聞』を「世論を操る道具」として利用した⁴¹⁾。『羅府日米新聞』廃刊(1931年9月)後, 山口県人会を中心とした藤井信奉者の後援により, 1931年11月5日, 『加州毎日新聞』(1992年廃刊)を創刊した。毀誉褒貶の多い人物ではあったが, カリフォルニア州「外国人土地法」(1913年, 1920年修正「インマン法」)に真向から挑戦・試訴し, 勝訴を取めたことは(1952年4月17日, カリフォルニア州最高裁は「外国人土地法」を憲法違反と判断。), 戦後の日系社会発展の礎を築いたものとして特筆されるべきである。⁴²⁾

493. 佐藤健一『羅府ぎぎゅう音頭 排日土地法を葬った藤井整の記録』善本社, 1983 (参考文献: pp. 313-315) <GK56-57>
「密航者密告事件」『桑港日米新聞』の労働争議等, 『加州毎日新聞』創刊の背景を踏まえ, 「外国人土地法」との闘いを中心に, 「人が右と言えば左、左と言え

ば右に走る」, 藤井の「ぎぎゅう」(山口地方方言)の生き方を描く。

494. 大野芳『羅府に斃る 亜米利加を愛した男の物語』潮出版社, 1984 (参考文献: pp. 293-294) <GK56-67>
上掲493『羅府ぎぎゅう音頭』及びフランク・F. チューマン『バンブー・ピープル』(前掲392・393)を基調に, 藤井の生涯を綴る。留学から八幡製鉄所時代まで, これまであまり知られていなかった部分についても触れられている。
495. 阪田安雄・田村紀雄『『炉端話』で農民の心をつかむ藤井整—『加州毎日新聞』を通じて垣間見る1937年の日系人社会 [含資料]』『東京経大会誌』146: 1986. 6, pp. 581-638 (日系新聞研究ノート 10) <Z22-393>
1930年代の南カリフォルニアの日刊邦字紙発行状況及び『加州毎日新聞』創刊(1931年)の経緯を踏まえ, 「アंकフル・フジイ」こと社主兼主筆・藤井整のコラム「わたしの欄(英文欄‘Uncle Fujii Speaks’)」の検証により, 農民の新聞・労働者の新聞として, 『加州毎日』が日系人社会において演じた役割を考察する。
496. 阪田安雄『『加州毎日新聞』と藤井整の周辺』田村編著『正義は我に在り 在米・日系ジャーナリスト群像』1995, pp. 121-143 <UC151-G1>
上掲495論稿のうち, 阪田の執筆部分「南カリフォルニアの日刊邦字紙—1930年代後半」及び『『加州毎日新聞』創刊の経緯—『密入国者』密告事件と藤井整の『私物日刊紙』』を加筆修正したもの。

③ 翁久允: 1888(明21)-1973

富山県中新川郡六郎谷に, 漢方医翁源指の二男として生まれる。幼少より父に漢籍を学ぶ。富山県立一中に入学するが放校処分となり, 1905年(明38)上京し順天中学に編入学する。折りからの渡米熱で1907年渡米, シアトルで日雇労働を続け, 1908年, 20歳でシアトル近くブレマートンの小学校を卒業した⁴³⁾。1909年『旭新聞』(シアトル)の新年小説に二等入選, 新聞小説への投稿時代が始まった。1909年秋には, 翁の提唱で「シアトル文学会」を結成, 多くの文士と交流を重ねた。1915年『桜府日報』スタックトン支社主任, 1917年『日米新聞』オークランド支社主任を歴任し, 1924年(大13)帰国。帰国後は『東京朝日新聞』社に入社, 『週刊朝日』編集長として内外の文化人と接触を持った。自らも『中央公論』『改造』『新潮』等に, アメリカ時代の体験を基にした「移民地文芸」を発表した。「日本精神の源流を求めて郷土研究に打ちこもうと発心」し帰郷, 1936年(昭11)9月, 郷土研究誌『高志人』を創刊した⁴⁴⁾。自伝『わが一生』を含む, コスモポリタン翁の膨大な著作は, 下掲500『翁久允全集』に収録, また1万数千冊の蔵書は富山市立図書館に寄贈, 公開されている⁴⁵⁾。

497. 逸見久美『わが父翁久允 その青少年時代と渡米』オリジン出版センター, 1978 <KG583-90>
「おいたち」から富山一中放校事件を経て渡米するまでと, 渡米後のシアトル時代を描く。「はじめに」は娘の目から見た翁の生涯の簡便な纏め, 「あとがき」

は『翁久允全集』各巻の細目に簡単な解説を付している。

498. 伊藤一男「米国西北部の帰国知識人」田村・白水編『米国初期の日本語新聞』1986, pp. 327-336 (「4 翁久允」 pp. 333-335) <UC151-9>
翁久允に関する簡単な紹介。
499. 稗田董平『筆魂・翁久允の生涯』桂書房, 1994 (翁久允年譜: pp. 251-265, 参考文献・資料: pp. 265-280, 翁久允著書解題: pp. 280-289) <KG583-E91>
「筆魂・翁久允その軌跡」として、『北日本新聞』に1991年4月から82回にわたって連載されたもの。「年譜」「参考文献」「著書解題」等資料も充実し、翁に関する最も詳細な評伝となっている。
500. 翁久允全集刊行会編『翁久允全集』全10巻, 翁久允全集刊行会, 1971-74 <KH471-11>
第1巻—「わが一生 生いたちの記」: 幼少時代から渡米までの経緯/第2巻—「わが一生 海のかなた」: シアトル, プレマートン時代の文学運動と移民地文芸の発祥/第3巻—「わが一生 金色の園」: スタックトン—『桜府日報』, オークランド—『日米新聞』時代/第4巻—「わが一生 帰国」: 帰国から『高志人』創刊まで。翁の前半生を記す。

④ 清沢洌: 1890(明23)—1945

長野県南安曇郡北穂高村の裕福な農家の三男として生まれる。1903年(明36) 内村鑑三の影響を受けた井口喜源治の「研成義塾」に学ぶ⁴⁹⁾。井口の勧めで、1907年渡米, 苦学をしながらウィットウォース大学で政治・経済学を学んだ。1913年(大2) 研成義塾出身者の結束を目的に, シアトルで「穂高俱樂部」を結成し, 機関誌『新故郷』を発行。1918年帰国するまで『北米時事』(シアトル)『新世界新聞』(サンフランシスコ)の記者として活躍。帰国後は『中外商業新報』をはじめ『東京朝日新聞』『報知新聞』『東京経済新報』等の要職を歴任, 「リベラリストとしてラジカルな論陣を張」った。一方, 外交問題特にアメリカ問題及び日米関係の専門家として『日本外交史』等の著作を残し, 現在なお高い評価を得ている。また一般には、『暗黒日記』の著者としてよく知られている。

501. 山本義彦編・解説『清沢洌選集』全8巻・別冊1, 日本図書センター, 1998 <US21-G34>

30冊をこえる清沢の著作から, 清沢の生きた時代時代を代表する単行書を刊行年順に収録。別冊として, 編者による各巻解題及び「解説」(下掲507)を付す。

502. 清沢洌『暗黒日記』⁴⁹⁾

将来日本現代史を執筆するための「備忘録」として書き続けられたもの(1942-45年, 原題「戦争日記」)。政治・経済状況から身辺雑記まで記すなか, 戦時期日本の政治・外交政策に対する鋭い批判は, リベラリスト清沢の真骨頂を示すものとして評価されている。

498. 伊藤一男「米国西北部の帰国知識人」田村・白水編『米国初期の日本語新聞』

- 1986, pp. 327-336 (『3 清沢冽』 pp. 329-333) <UC151-9>
 ジャーナリストとしての清沢に関する簡単な纏め。
503. 北岡伸一『清沢冽 日米関係への洞察』中央公論社, 1987(中公新書)(清沢冽略年譜: pp. 194-197, 参考文献: pp. 198-201) <GK74-170>
 自由主義的言論人, 清沢の全体像を解明する初の評伝。「序章 青年時代」(pp. 2-24)において, 研成義塾・アメリカ時代の足跡を辿り, 後年の思想的枠組に影響を与えた「移民問題」を取上げる⁴⁸⁾。
504. 北岡伸一「若き日の清沢冽—サンフランシスコ邦字紙『新世界』より」『思想』765: 1988. 3, pp. 58-73 <YA5-108>
505. Kitaoka, Shinichi. “Kiyoshi Kiyosawa in the United States—His Writings for the San Francisco *Shinsekai*.” *Japanese Journal of American Studies*. 3: 1989, pp. 65-87. <Z52-D309>
 『北米時事』主宰松原木公が『新世界新聞』経営に移ったのを機に, 1914年(大3)10月頃, 清沢も『新世界新聞』記者となった。本稿は, 『新故郷』(シアトル「穂高倶楽部」機関誌)及び『新世界新聞』に執筆した清沢の「移民問題」に関する記事・論説を手がかりに, 後年の思想形成への影響を検証する。上掲503『清沢冽』の補論となるものであり, 清沢の邦字新聞への具体的関与例として重要である。505は, 504に加筆修正した英語訳。
506. 山本義彦『清沢冽の政治経済思想 近代日本の自由主義と国際平和』御茶の水書房, 1996 <GK74-G10>
 主に『静岡大学法経研究』に発表されたこれまでの論稿を改編, 圧縮し纏めたもの。本書各章の出典・原題が「はしがき」(pp. iii-iv)に掲示されているので, 個々の論稿についての書誌事項は省略する。「序章 清沢冽の生涯と自由主義の立場」「第一章 清沢冽の人物像」が渡米から在米時代の清沢の人となりを伝える。
507. 山本義彦「清沢冽の生涯と自由主義、平和主義」山本義彦編・解説『清沢冽全集 別冊 解説・解題』日本図書センター, 1998, pp. 7-73(二〇世紀世界の戦争と平和、清沢冽関連年表: pp. 85-88) <US21-G34>
 上掲506『清沢冽の政治経済思想』「序章」を基本として, その後発表された「清沢冽のジャーナリズム論—「非常時」日本の自由主義と新聞」『静岡大学経済研究』1(3・4): 1997. 3, pp. 33-59<Z3-B582>を加え補正したもの。上掲503. 北岡『清沢冽』とともに, 清沢冽の全体像を照射する基本的論稿である。Yamamoto, Yoshihiko. “The Life of KIYOSAWA Kiyoshi and Its Lessons for Our Times—A Liberal Critic of Japanese Militarism During the Second World War.”『静岡大学経済研究』5(2): 2000. 8, pp. 1-24<Z3-B582>は, 清沢の生涯・思想を簡明に紹介する英文論稿。

⑩ 浅野七之助: 1894(明治27)-1993

岩手県盛岡市新穀町で代々「油商」を営む父幸三郎の四男として生まれる。盛岡

商業学校卒業後上京し、1913年(大2)原敬の書生となる。1916年『東京毎夕新聞』入社、カリフォルニア州の日系人の状況を視察するために、1918年特派員として渡米。1920年『日米新聞』(サンフランシスコ)記者となる。『東京朝日新聞』の米国西部沿岸通信員嘱託を兼務し、1934年『日米新聞』編集局長に就任した。日米開戦によりトパーズ戦時転住所に移転、この間、戦時中も発行されていた『ロッキー新報』(『ロッキー日本』→)の編集に関わる。民族擁護の世論喚起のため、1946年5月18日、『日米時事新聞』を創刊、「外国人土地法」改正、帰化権獲得運動等を指導した。また、浅野の提唱した「日米難民救済運動」は米国全土に広がり、「アジア救済公認団体(LARA) *Licensed Agencies for Relief in Asia*」による、いわゆる「ララ物資」として知られている⁴⁹⁾。1987年5月16日、サンフランシスコ市は浅野の日系人の権利擁護及び「ララ物資」の父としての功績を認め、「サンフランシスコにおける浅野七之助デー」を制定した。

508. 浅野七之助『在米四十年 私の記録』有紀書房、1962(年譜: pp.293-294)

<289.1-A897z>

原敬の書生時代から渡米時代・『日米新聞』記者時代・『日米時事新聞』創刊を経て、外国人土地法と帰化権問題の勝利までの活動を記述する「私の記録」と日本探訪記「戦後の日本を見る」で構成される。何れも『日米時事新聞』に連載されたもの。

509. 「聴きとりでつづる新聞史 浅野七之助」『別冊新聞研究』9: 1979.10, pp.12-29(「聴きとりでつづる新聞史 海外編 I」)

<Z21-670>

浅野からの聴きとり(1978年3月20日)による略伝。「聴きとり」ならではの余話も多い。

510. 長江好道『日系人の夜明け 在米一世ジャーナリスト浅野七之助の証言』岩手日報社、1987(参考資料・文献: pp.235-238, 浅野七之助在米七〇年年譜: 239-257)

<DC812-E30>

「プロローグ」「第一章 原敬の書生からジャーナリストの道へ」「第二章 太平洋戦争と日系人の強制収容」「第三章 ララ運動を提唱」「第四章 日系人のカリフォルニア外国人土地法改定の運動」「第五章 日本人の帰化権獲得の運動」「エピソード」からなる詳細な評伝。原稿から三校まで、浅野と連絡を密にし「正確性を期した」という「年譜」は、日系新聞関連事項も多く有用である。

511. 滑川巖「追憶 日米時事・浅野七之助氏の生涯」『季刊海外日系人』32: 1993.5, pp.66-68

<Z3-1360>

『日米時事新聞』会長・滑川による追悼記事。内容は概ね上掲文献に拠ったものである。

⑪ 寺沢国子: 1896(明29)-1991

長野県飯田町の素封家の次女として生まれる。飯田高等女学校卒業後、共立女子職業専門学校(現、共立女子大学)被服科に入学、教員の資格を得る。卒業後母校

の裁縫の教師を務め、1921年(大10) 同郷伊那出身で、『ユタ日報』(1914年創刊)を
経営する寺沢畦夫と結婚、渡米する。1939年4月畦夫死去、国子は「亡夫の遺志を
継いで新聞と死を共にする覚悟で」『ユタ日報』社長に就任した。爾来まさに、95歳
でその生涯を閉じるまで、50余年間にわたり『ユタ日報』を発行し続けた。

512. 猿谷要『アメリカ大西部』新潮社,1978(新潮選書) <GH237-5>

「ソルトレーク・シティの女性編集者」(pp.181-187)として、比較的早い時
期に、寺沢を日本に紹介した旅行記。

513. 上坂冬子『おばあちゃんのユタ日報』文芸春秋,1985 <UC151-7>

上坂冬子『おばあちゃんのユタ日報』文芸春秋,1992(文春文庫) <UC151-E6>

創刊者・寺沢畦夫亡き後、社長兼記者兼植字工として『ユタ日報』を発行し続
けた寺沢国子の気骨あふれる人生を、『ユタ日報』の変遷と日米関係を背景に描
く。1985年3月1日から7月4日まで86回にわたって『信濃毎日新聞』に連載さ
れた「信州女のユタ日報」を大幅に加筆修正。寺沢の死後刊行された「文春文
庫」版には、寺沢を初めて本格的に紹介した猿谷要による「解説—おばあちゃん
と私たち」を付し、追悼する。

514. 田村紀雄「おばあちゃん達の『ユタ日報』」『図書』528:1993.6, pp.18-21

<Z21-184>

寺沢畦夫・妻国子・長女和子、家族で支えた『ユタ日報』略史。

515. 本郷文男『松本市・ソルトレークシティ姉妹提携35周年を迎えて「ユタ日報」寺
沢国子さんを偲んで』松本市ソルトレークシティ姉妹提携委員会,1993(参考文
献:p.380) <UA81-E135>

1993年、松本市・ソルトレークシティ姉妹都市提携35周年の記念すべき年、
『ユタ日報』原紙(813号:1917年8月1日~)とその活字が松本市に寄贈された
(松本市立中央図書館所蔵)。本書は、『ユタ日報』社長・寺沢国子(松本市名誉
市民)を偲び、寺沢と『ユタ日報』のこと(「序章」pp.1-57)、姉妹都市提携の
経緯・交流経過、ソルトレークシティの概況及び『ユタ日報』寄贈の経緯(「第
6章『ユタ日報』松本市に寄贈」pp.243-290)等を、関係資料・論文を収録し
纏める。寄贈原本を基に開戦前から終戦前後まで(6719号:昭和16年1月1日-
7449号:昭和20年12月28日)の『ユタ日報 復刻版』が刊行されている⁵⁰⁾。

⑫ 芳賀武:1900(明33)-1988

山梨県東山梨郡中牧村に生まれる。1917年(大6)父の呼び寄せで渡布、砂糖キビ
耕地で働く。1918年『布哇報知』事務局に入り、夜学で英語を学ぶ。1923年、「ブラ
ンケット担ぎ」と呼ばれる季節労働者としてサンフランシスコに渡る。1927年ニュ
ーヨークに移り、コロンビア大学エクステンション・コースに入学。横浜正金銀行
(現、東京銀行)行員として働き、1938年アメリカ共産党に入党する。この間の事情
については、下掲516-521でそれぞれ詳しく述べられている。1941年5月、日本人排
斥運動に対処するため「東部日本人共護委員会」を組織、日米開戦後は、日本軍国

主義に反対する「日米民主委員会」に改組し、機関紙『**紐育時事**』を発行。戦時中は、アメリカ「戦略奉仕局(OSS) *Office of Strategic Service*」に協力し、対日工作に従事した。終戦後1945年11月、芳賀をはじめ、貴田愛作ら「日米民主委員会」のメンバーによって『**北米新報**』(→『**ニューヨーク日米新聞**』1993年7月廃刊)が創刊された。1955年『**北米新報**』を貴田に任せ、マッカーシズムが席捲するアメリカを去る。帰国後は「アメリカ研究所」を主宰(1963年設立、1966年からは病気のため陸井三郎に引継ぐ)、進歩派のリーダーとして、原水禁運動や各種住民運動に積極的に参加、活動した。⁵¹⁾

516. 芳賀武『**蒼氓の移民宿 大正六年ハワイを旨とした17歳少年のヨコハマ物語**』創英社, 1990 <DC812-226>
 517. 芳賀武『**ハワイ移民の証言**』三一書房, 1981 <DC812-123>
 518. 芳賀武『**カリフォルニア移民の断面**』創英社, 1984 <DC812-226>
 519. 芳賀武『**自由の女神よアメリカを見よ**』未来社, 1972 <GH118-37>
 520. 芳賀武『**紐育ラプソディ ある日本人共産党員の回想**』朝日新聞社, 1985 <DC812-231>

(家永三郎責任編集『日本平和論大系 20』日本図書センター, 1994<A75-E212>に再録。445. 田村編著『海外ヘュートピアを求めて』に抜粋・抄録。)

521. 芳賀武『**ニューヨーク遊民団 大恐慌の目撃者たち**』PMC出版, 1988 <GH158-E13>

上掲516-521は、芳賀の渡航時(横浜)・ハワイ・カリフォルニア・ニューヨーク各時代を記録する自伝。521は、雑誌『**汎**』に連載中絶筆となった「ハロー、黄金色のニューヨーク」を改題して刊行したもの。

522. 芳賀武追悼文集をつくる会編『**追想・芳賀武**』芳賀武追悼文集をつくる会, 1989(芳賀武の生涯: pp. 213-247) <GK47-E16>

芳賀の一周忌に刊行された追悼集。寄稿29篇を、戦前の在米時代・戦後の在東京時代・横須賀時代に分け収録する。年譜「芳賀武の生涯」は詳細で有用。

【カナダ】

① 鈴木悦: 1886(明19)-1933

愛知県渥美半島の漁村老津村(のち豊橋市に編入)の漁師の家に生まれる。1900年(明33)小学校卒業後奉公に出るが、懇願して、翌年成城中学へ入学。その後東京外語仏文科及び早稲田大学英文科を卒業し、黒岩涙香の『**萬朝報**』記者となり、『**早稲田文学**』を中心に多数の時評・創作を発表する。『**婦人評論**』編集長を最後に『**萬朝報**』を退社し、植竹書院に入社。翻訳部主任として「文明叢書」の刊行等意欲的な仕事を手がけた。この頃、田村俊子と知り合う。植竹書院の経営悪化し、1915年退社、『**洪水以後**』『**朝日新聞**』を経て、1916年、トルストイ『**戦争と平和**』全訳二巻本を翻訳刊行、長い間定訳テキストとして版を重ねた⁵²⁾。1918年三男が死去、最初の妻彦坂かねとの間に生まれた四人の男児すべてが早逝した(かねとは1922年に正式離婚、翌1923年、悦と田村俊子は正式に結婚している)。1918年4月『朝日新

聞』を辞め、5月『大陸日報』（1907年創刊）社長・山崎寧の招きでカナダに渡る。10月田村俊子も悦を追ってカナダへ。1919年後半から1920年にかけての製材所ストに直面し、『大陸日報』主筆としての悦は、日系人の労働運動に関与することになる。悦は、日系労働者の意識改革と組織の必要性を痛感し、1920年7月「加奈陀日本人労働組合」を組織、機関紙『労働週報』を発行した。労働運動への関与を強めた悦は、1924年3月『大陸日報』主筆を辞し、労働組合経営の一般紙『日刊民衆』を創刊した。1932年、悦は『日刊民衆』を梅月高市に任せ、一時帰国中急死した。ブリティッシュ・コロンビア州の日系カナダ人労働者は、今もなお、鈴木悦を精神的な支えとして慕っているという。

137. 新保満[ほか]著『カナダの日本語新聞—民族移動の社会史』1991

<UC151-E7>

「第三章 日系労働運動と『労働週報』」（pp.81-100）、「第四章『日刊民衆』と鈴木悦・田村俊子」（pp.101-138）が『労働週報』から『日刊民衆』に至る日系カナダ人労働運動の意義と、鈴木悦及び田村俊子の役割を考察している。

523. 田村紀雄『鈴木悦 日本とカナダを結んだジャーナリスト』リポート、1992（シリーズ民間日本学者 35）（主要参考文献・資料ほか：pp.294-298、年譜：pp.300-305）

<GK132-E106>

新聞記者・雑誌編集者・小説家・労働運動指導者等、日本とカナダを舞台に活躍した鈴木悦。日系人労働運動の歴史及び田村俊子との関係を軸に悦の多彩な生涯の「全容」を初めて描く⁵³⁾。

[2] ハワイ⁵⁴⁾

524. Sakamaki, Shunzo. "A History of the Japanese Press in Hawaii." Master's Thesis, [History], University of Hawai'i, 1928.

<未所蔵>

ハワイで発行された日系紙の歴史及び将来の課題を纏めた修士論文。直接の調査に基づき、当時発行されていた新聞10紙・雑誌7誌及び主な廃刊紙について記述する。ハワイ日系新聞に関する英語概説書が少ないなか、引用されることの多い文献であり、454. Chapin, Guide to Newspapers of Hawai'i: 1834-2000. も日系新聞に関する記述の典拠としている。

525. 山下草園「ハワイ邦人言論機関発達史（上、中、下）」『新聞研究』22：1952.12 pp.25-31, 23：1953.2 pp.22-27, 24：1953.5 pp.22-27 p.34

<Z21-88>

ハワイ邦字紙の創刊意図は大衆の権利擁護にあり、そのため経営上の合理化に乏しく、少数の例外を除き永続しなかった、と特徴づける。また、在留邦人が邦字紙を要求する必要性とその編集・経営方針を分析し、ハワイ日系社会における主要事件への邦字紙関与例を記す。詳細な「布哇邦字新聞雑誌、創刊改題年表」を付し、ハワイ邦字紙六十年間の消長を概観する。

526. 田村紀雄・白水繁彦「ハワイ日系プレス小史（上、中、下・前篇）[含資料]」『東

京経済大学人文自然科学論集』67：1984.7 pp.57-88, 69：1985.3 pp.145-196,
74：1986.12 pp.163-228(在米日系新聞の発達史研究 6,8,9) <Z22-394>

ハワイ「日系プレス」のコミュニケーション論的・社会学的研究の基礎的資料として、その関与した事件・運動等を踏まえ、日系コミュニティの変遷に基づく日系プレスの消長を以下の年代順に「素描」する。第一期：前史1884年以前／第二期：黎明期1885-1907年／第三期：成長期1908-24年／第四期：全盛期1924-41年／第五期：受難期1941-45年／第六期：復興・転換期1946年-現在。なお、第五-六期については、日系コミュニティの「社会構造的」及び「社会意識的」側面の詳細な分析で終わっており未完である。先行諸文献に基づく詳細な研究は、ハワイ日系新聞に関する基本文献となっている。「1927年現在のハワイ日系プレス一覽」「1935年現在の日系プレス一覽」「日米開戦時(1941年)の主なる日系プレス」「ハワイ日系プレスの『黎明期』『成長期』『全盛期』の『新聞・雑誌創刊年代別一覽』」「開戦前ハワイにおける日系新聞・雑誌」を付す。

527. 田村紀雄・飯田耕二郎「ハワイ初期の日本語新聞 1880~1930. キリスト教会を中心に [含資料]」『東京経済大学人文自然科学論集』94：1993.7, pp.61-93(在米日系新聞の発達史研究 19) <Z22-394>

『日本週報』『布哇新聞』『布哇新報』『やまと』等10種の「ハワイ初期日本人による新聞」、及びマキキ聖城基督教会所蔵の「キリスト教ジャーナル」について、飯田が書誌的に記述、「ハワイの土になった勝沼富蔵と林三郎」及び「ハワイの宗教活動と日本人」を田村が記述し「ハワイ日本語新聞研究の課題」を纏めている。

528. 飯田耕二郎「ハワイ・日系キリスト教会の草創期の機関紙」田村編著『正義は我に在り在米・日系ジャーナリスト群像』pp.13-38 <UC151-G1>

上掲527論稿の飯田執筆部分「初期の日本人による新聞についての一考察」「キリスト教ジャーナルについて」「奥村多喜衛の諸活動新聞事業との関係」を圧縮・修正し、再編したもの。

529. 田丸忠雄『ハワイに報道の自由はなかった 戦時下の邦字新聞を編集して』毎日新聞社, 1978 <DC812-73>

日米開戦により、邦字刊行物は発行停止となった。その後『日布時事』及び『布哇報知』の二紙が発行停止を解かれ、軍政を徹底させるための「御用新聞」となった。厳密な検閲体制下で、「敵国語新聞」を編集し続けた田丸(当時『日布時事』記者)が「軍部提供社説」や「天皇漫画」等、その間の経緯を身辺の記録を交えて記録する。米国陸軍による「布告と全般命令」(抄)を付す。

530. Chapin, Helen Geracimos. **Shaping History: The Role of Newspapers in Hawai'i**. Honolulu: Univ. of Hawai'i Pr., 1996. (Bibliography: pp.347-371)

<未所蔵>

1834年ハワイ初の新聞発行から現代まで、各時代において新聞が歴史形成に果たしてきた役割を検証し、衛星放送時代におけるその存在意義と可能性についても探る。ハワイ史における日本人及び日系人の重要性に応じ日系新聞についても

多くの頁が割かれている。初期日系新聞発行の概観、及び『日布時事』『布哇報知』等主要紙の事件関与例を記述し、ハワイ日系新聞に関する基本的な英語文献ともなっている。

[3] アメリカ本土⁵⁵⁾

531. 新井勝紘・田村紀雄「自由民権期における桑港湾岸地区の活動 [含資料]」『東京経済大学人文自然科学論集』65:1983.12, pp.75-136(在米日系新聞の発達史研究 5) <Z22-394>
『新日本』『世界の魁』『鶴鳴新聞』(以上オークランド)『東雲』『サンフランシスコレビュー』『蒸気船』(以上サンフランシスコ)『第十九世紀』(愛国同盟)『新日本』(愛国同盟日本支部機関誌)等, サンフランシスコ湾岸地区における邦字新聞発行の経緯を, 自由民権派の活動を踏まえて詳述する。本稿は主に, 1990年, 新井により日本国内で新たに発見された「史料」に基づいており, 「在米邦人活動関係年表(1885~1895)」(pp.118-132)も含め, 蛭原『海外邦字新聞雑誌史』愛国同盟部分を補足・訂正するものとして重要である⁵⁶⁾。
532. 新井勝紘「自由民権期の渡米邦人活動史(序)」田村・白水編『米国初期の日本語新聞』1986, pp.233-256 <UC151-9>
渡米邦人の思想・行動を自由民権運動と関連づける視点から, 「渡米の動機」「在米生活」「在米日本人労働組合と愛国同盟との関係」等, その研究課題を整理し, 課題の一つ「福音会の組織と活動」に焦点をあて考察する⁵⁷⁾。
533. 町田市立自由民権資料館編『アメリカからの便り—1880/90年代の渡米青年たち』町田市教育委員会, 1997(在米邦人活動関係年表: pp.176-182)(民権ブックス 10) <GH94-G3>
石阪公歴(町田市野津田町出身)の生涯を軸に, 南方熊楠・高野房太郎・福田友作・山口熊野ら民権家の軌跡を辿った展示会「アメリカからの便り—1880/90年代の渡米青年たち」(1996年11月2日-12月1日, 於:町田市立自由民権資料館)の記録集。愛国同盟はじめ在米民権派新聞(展示資料)についての詳細な解題, 及び「オークランドの邦字新聞『新日本』第八号」ほかの史料紹介が有用である。新井勝紘「在米民権家の行動と海を越えた連帯(講演録)」を収録する。
534. 田村紀雄・蒲池紀生・芳賀武「紐育日系新聞小史 [含資料]」『東京経大会誌』140:1985.3, pp.119-158(日系新聞研究ノート 7) <Z22-393>
ハワイやアメリカ西海岸の日系社会とは異なった事情にあった, ニューヨークにおける日系新聞発展史。ニューヨーク最初の邦字紙『紐育週報』(1897年創刊), 星一の『日米週報』(1899年創刊, →『日米時報』), 『紐育新報』(1911年創刊), 芳賀武が関与した『紐育時事』『北米新報』(1945年創刊, →『ニューヨーク日米新聞』)等の発行経緯を記し, 『北米新報』創刊者の一人, 芳賀武へのインタビューを付す⁵⁸⁾。

535. 田村紀雄「1880-1910, Portland日本語新聞と伴新三郎—外交官辞し, 日本語新聞発刊へ」『東京経済大学人文自然科学論集』93:1993.3, pp.65-89(在米日系新聞の発達史研究 18) <Z22-394>
 オレゴン州における日本人パイオニアの足跡を辿り、『休庵新報』『オレゴン新報』(1904年創刊, →『中央日報』)等邦字紙創刊の経緯を考察する。元布哇総領事館書記生からポートランドで実業界に転じた, 伴新三郎の新聞事業への援助と, オレゴン州における好日的な環境に果たした邦字紙の役割を検証する。
536. 田村紀雄「ポートランドの新聞事情と伴新三郎」田村編著『正義は我に在り 在米・日系ジャーナリスト群像』1995, pp.39-79 <UC151-G1>
 上掲534と同内容。
537. 田村紀雄・坂口満宏「シアトル初期の日本語新聞 [含資料]」『東京経済大学人文自然科学論集』92:1992.12, pp.39-70(在米日系新聞の発達史研究 17) <Z22-394>
 1890年代から1910年代におけるシアトル日本人社会の形成過程と日本語新聞の発展経緯を考察する。『シアトル週報』『おもしろ誌』『日本人』等初期日本語新聞の盛衰から『北米時事』(1902年9月創刊)『旭新聞』(1905年3月創刊)『大北日報』(1910年1月創刊)の三大日刊紙鼎立までを「主な記者たちのプロフィール」「不敬投書事件と『旭新聞』の没落」ほかのエピソードを交えて描く。「シアトル初期の日本語新聞一覧」がこの間の経緯を明解に示す。
538. 小玉美意子・田村紀雄「コロラド日系新聞小史—戦時下『格州時事』の日文・英文ページを中心に [含資料]」『東京経済大学人文自然科学論集』64:1983.7, pp.101-157(在米日系新聞発達史研究 4) <Z22-394>
 コロラド日系社会の発展過程における, 『伝馬新報』『コロラド新聞』^{コロラド・タイムズ}『格州時事』『ロッキー日本』等, 日系新聞発行の経緯を序に, 戦時中も発行され散逸の少ない『格州時事』^{コロラド・タイムズ}(1918年2月創刊, 『山東時事』『コロラド新聞』→, 1969年『日米時事新聞』に吸収)の紙面分析を基に, 「一世と二世の意識の相違」「コミュニティ・メディアの文化的変容」について考察する。戦後の『ロッキー・マウンテン時報』(1962年5月創刊)についても詳細に記述する。「コロラド州の日系新聞の系譜」(資料V)で, これらの創刊・改廃経過を図示する。
539. 水野剛也「日系アメリカ人立ち退き・収容におけるアメリカ政府の邦字紙管理政策 一九四一—一九四二」『マス・コミュニケーション研究』56:2000.1, pp.174-189(メディア支配と言論の多様性<特集>) <Z21-85>
540. 水野剛也「日系アメリカ人強制収容所における新聞発行政策 一九四二—一九四三—収容所管理当局の基本的政策, およびその意図と運用」『アメリカ研究』34:2000.3, pp.211-228, 266-267 <Z8-43>
 539-540は, 「大戦中のアメリカ政府が戦争政策の促進と市民的自由保護とのバランスにおいて, 自国内でどの程度の『言論・プレス』の自由を許容したか」という視座での一連の論稿。

539では、日米開戦による邦字紙発行停止の過程（1941年12月-42年5月）で、アメリカ政府は、より緩やかな言論統制をとりながら、「政策・命令の伝達」「アメリカ化の手段」「印刷施設の有効利用」という目的で邦字紙を管理・利用し続けた実態を、『羅府新報』『日米新聞』『山中部の日系新聞』を例に実証する。540は、539に引き続き、強制収容所内における日系新聞発行に対する「戦時転住局(WRA) *War Relocation Authority*」の政策決定過程、及びその運用の実態を検証する。何れも、アメリカ国立公文書館、カリフォルニア大学バークレー校バンククロフト図書館所蔵の一次史料に多く依拠しており、日本では本格的な研究がなされていない領域であり、貴重な論稿である⁵⁹⁾。

[3] カナダ⁶⁰⁾

541. 白水繁彦・田村紀雄「カナダにおける日系新聞発達小史」『東京経済大学人文自然科学論集』63：1983.3, pp. 37-62(在米日系新聞発達史研究 3) <Z22-394>
コミュニケーション分析の「S(送り手)－M(メッセージ)－C(チャンネル)－R(受け手)－E(効果)」モデルをパラダイムとし、本稿では主に「送り手から見た日系新聞発達史」の再構成を試みる。「受け手」であるカナダ日系社会の消長を、新保満による時代区分（『カナダの素顔』1981, pp.215-218）に従って概観し、カナダの日系新聞を一カナダ日系新聞の嚆矢：『^{バンクーバー}晩香坡週報』（1897年創刊）の系譜、カナダの『萬朝報』：『大陸日報』（1907年創刊）の系譜、労働新聞の系譜：『日刊民衆』（1924年創刊）、二世の新聞の系譜：『ニュー・カナディアン』（1939年創刊）、「戦後の新聞」とし、その系譜を鳥瞰する。
542. 白水繁彦「カナダにおける日系新聞の役割と現状」海外日系新聞協会編『報道関係者等国際交流（海外日系新聞）十年の歩み』海外日系新聞協会, 1983
<未所蔵>
543. 白水繁彦「カナダのエスニック・プレス」『カナダ研究年報』5：1984.9, pp.57-69
<Z8-1643>
270余りのカナダにおけるエスニック・プレスを、プレス数とコミュニティ、特に人口との関係で検証することで、カナダにおける日系プレスの位置づけをも試みる。
544. 新保満・田村紀雄「戦前カナダの日系紙——世の新聞と二世の新聞（上, 中, 下）[含資料]」『東京経大会誌』133：1983.11 pp.317-343, 135：1984.3 pp.99-142, 136：1984.6 pp.221-249(日系新聞研究ノート 2,3,4) <Z22-393>
上掲541. 白水・田村「カナダにおける日系新聞発達小史」を「社会学的分析」（「同化志向の強度」変数と「同化の難易度」変数）の方法論をもって補完することを意図した論稿。戦前のカナダ日系紙の変遷消長を、『加奈陀新報』『大陸日報』の成立とその展開過程を中心に、二世を対象とした『ニュー・カナディアン』の誕生まで、日系社会の構造変化を踏まえ論述する。

545. 田村紀雄・新保満「戦時中カナダの日系紙（上—『ニュー・カナディアン』の分析, 中, 下）[含資料]」『東京経学会誌』145：1986.3 pp.233-267, 147：1986.9 pp.271-309, 150：1987.3 pp.223-258(日系新聞研究ノート 9,11,12)

<Z22-393>

カナダにおいて、戦時中も発行され続けた唯一の日系紙『ニュー・カナディアン』。戦時下日系コミュニティにおいて、『ニュー・カナディアン』が果たした役割を、紙面分析等様々な側面から検証する。「二世忠誠問題」について、アメリカの日系強制収容所新聞『トパーズ時報』とも比較を試みている。

546. 新保満「カナダの日系紙と日系社会」『移住研究』24：1987.3, pp.1-14

<Z3-854>

上掲544. 545論稿の「あらすじ」ともなっている簡単な総括。移民草創から太平洋戦争に至る時代では、「同化志向」と「反同化志向」の対立という視座から日系新聞の盛衰を検証し、戦時期唯一発行を許可された『ニュー・カナディアン』を分析する。これらを踏まえ、日系社会及び日系紙の現状と展望を述べる。

137. 新保満[ほか]著『カナダの日本語新聞—民族移動の社会史』PMC出版, 1991 ((日系カナダ人/カナダ・日本) 関係事項略年表：pp.262-275)

<UC151-E7>

「日系新聞研究会」二冊目の共同研究書。「カナダ日系紙のフレーム」「日系社会とメディア・システム」「日系労働運動と『労働週報』」「『日刊民衆』と鈴木悦・田村俊子」「戦時中の日系社会と新聞」「戦後の日系社会と言論」「カナダのエスニック・プレス概観」の構成で、カナダの日系紙と日系社会との相関関係を歴史社会的に考証する。共同執筆者、新保満・田村紀雄・白水繁彦がこれまで発表してきた論稿を基に加筆修正したものである。ホスト社会カナダの政治的・社会的基盤変動により、理論的には「カナダの日系紙は、全体として減退」すると結論づけている。

[5] 国内発行新聞の記事集成等

【新聞集成・記事目録一般】

547. 明治編年史編纂会編『新聞集成明治編年史』全15巻(全巻索引), 財政経済学会, 昭9-11 <614-181>

『新聞集成明治編年史』全15巻(全巻索引), 財政経済学会, 昭9-11(編纂代表：中山泰昌) <210.6-Sh61ウ>

新聞集成明治編年史編纂会編『新聞集成明治編年史』全15巻(全巻索引), 林泉社, 1936-40 <210.6-Si461-S>

中山泰昌編『新聞集成明治編年史』全15巻(全巻索引), 本邦書籍, 1982(財政経済学会, 昭9-11刊の複製) <GB415-71>

548. (明治)大正昭和新聞研究会編『新聞集成大正編年史』全44巻, (明治)大正昭和

- 新聞研究会, 1969-1987 <GB461-16>
549. 『新聞集録大正史』全15巻(大索引), 大正出版, 1978 <GB461-20>
550. 明治大正昭和新聞研究会編『新聞集成昭和編年史』刊行中, 明治大正昭和新聞研究会(新聞資料出版), 1955~ <GB511-171>
551. 『新聞集成昭和史の証言』昭和元年-20年, 全20巻(全索引), 本邦書籍, 1983-87 <GB511-152>
- 『新聞集成昭和史の証言』昭和21年~, 刊行中, SBB出版会, 1991~ <GB511-152>
552. 神戸大学経済経営研究所編『新聞記事資料集成』明治44年-昭和19年, 全39巻, 大原新生社, 1973-76 <GB411-59>
553. 明治ニュース事典編纂委員会編『明治ニュース事典』全8巻, 総索引, 毎日コミュニケーションズ, 1983-86 <GB8-116>
554. 大正ニュース事典編纂委員会編『大正ニュース事典』全7巻, 総索引, 毎日コミュニケーションズ, 1986-89 <GB8-163>
555. 昭和ニュース事典編纂委員会編『昭和ニュース事典』全8巻, 総索引, 毎日コミュニケーションズ, 1990-94 <GB8-E35>
556. 国際ニュース事典出版委員会編『国際ニュース事典 外国新聞に見る日本』1852(嘉永5)-1945, 全6巻, 毎日コミュニケーションズ, 1989~ <GB391-E24>
557. 『朝日新聞記事総覧』大正元年-昭和63年, 全45巻, 人名索引10巻, 日本図書センター, 1985-1991(複製版) <Z99-5>
- 上掲547-557の構成及び特色等につき, 毛利和弘『文献探索法の基礎 98-レポート・論文作成・調査必携一図書、雑誌、新聞、電子情報編(ゼネラルから主題調査まで)』アジア書房, 1998(「3 新聞記事の探し方」pp.97-116) <UL735-G1>が詳細に解説しているので参照されたい。なお最新2000年版も刊行されている。
558. 『外国の新聞と雑誌』(日本読書協会会報 乙種) 日本読書協会 <雑56-35>
- 外国の主要な新聞及び雑誌から時宜に応じた論説・記事を転載したものを。
- 【主題別の新聞集成・記事目録】
559. 日米修好通商条約百年記念行事運営会編『万延元年遣米使節史料集成 第六巻』風間書房, 1961 <210.593-M175-N>
- ハワイ王国及びアメリカ合衆国発行の新聞に掲載された, 「万延元年遣米使節」関係の主要記事(英文)を集録する(ハワイ王国新聞記事: 1860年3月8日(万延元年2月17日)-5月31日(万延元年4月12日)), アメリカ合衆国新聞記事: 1860年1月21日(安政6年12月30日-1861年2月5日(万延元年12月27日))。移民前史として参照されたい(前掲『参考書誌研究』No. 47, I.注19), pp.12-13)。
560. 比嘉武信編著『新聞にみるハワイの沖縄人 戦前編』Honolulu, 比嘉武信, 1990 <DC812-E93>
561. 比嘉武信編著『新聞にみるハワイの沖縄人 戦後編』Honolulu, 比嘉武信, 1994

<DC812-E93>

「ビショップ博物館図書室」等所蔵の『日布時事』(→『布哇タイムス』)『布哇報知』(→『ハワイ報知』)を中心に沖縄移民関係の記事を選択、編集したもの。沖縄県人移民史のみならず、ハワイ日系人史としても有用な史料となっている。

562. 『米国ハワイ州内発行新聞所載沖縄関係記事1941～1950』沖縄県立図書館, 1994
<未所蔵>

563. 田港朝和「沖縄最初の移民に関する新聞記事」『史料編集室紀要』13: 1988.3,
pp. 96-101 <Z8-1380>

「移民に関する新聞記事—明治36・37年」～『史料編集室紀要』16:
1991.3, pp. 33-61～ <Z8-1380>

「移民の歴史が概観できる基礎史料」として、『琉球新報』『沖縄毎日新聞』等から、沖縄の移民事情のみならず、日本全国及び移民地先の移民事情を伝える記事を年代順に収録する。このほか移民関係の記事集成として、特に沖縄では、「県史」をはじめ「市町村史」等で「新聞集成」の巻を立てているのが特徴的である。

564. 佐々木敏二「戦前のマスコミに見た移民関係記事を追って 湖東移民の実状」『汎』2: 1986.9, pp. 156-157 <Z23-548>

1913年から1940年までの『朝日新聞(京都・滋賀版)』の記事から、移民政策と滋賀県人の移民に関わる記事を紹介する。

565. 「新聞にみる移民の歴史」中国新聞『移民』取材班『移民』中国新聞社, 1992.
pp. 460-463(中国新聞創刊100周年記念企画) <DC812-E153>

『中国新聞』及び『芸備日日新聞』掲載主要記事を、「出稼ぎ」「移民会社」「文化摩擦」「排日と戦争」「送出国から受け入れ国へ」の項目に分け、移民の歴史を辿る。

566. 大谷勲「『横浜貿易新報』にみるハワイ・北米移民関連記事一覧 明治三十一年編」『郷土よこはま』123-124: 1993.3, pp. 1-40 <Z8-55>

『横浜貿易新聞』(明治31年当時)に掲載されたハワイ・北米移民関連記事(時代的にハワイ併合及び契約移民問題が中心)及び広告を抽出、復刻・収録する。

567. 国立国会図書館所蔵「新聞切抜資料」

1948年から1993年までの国内紙からの「新聞切抜資料」。検索は『新聞切抜分類項目一覧』『新聞切抜事項名索引』等による。「国際十進分類法」(UDC)に準拠して整理。移民関係は、「325 移住, 植民, 亡命, 民族運動」に分類されている。

Ⅶ. 注

- 1) 「日系新聞」の定義につき、例えば、本号459. 田村・白水「在米日系新聞の発達史研究序説」『東京経済大学人文自然科学論集』61, pp. 61-62 (2 主要概念の定義・整理 (7) 日系新聞)を参照のこと。
- 2) 光永星郎 (1866(慶応2)-1945) は, 1901年(明34) 7月, 広告代理業「日本広告株式会社」を創立し, 同時にニュース通信業「電報通信社」も併立した。1906年

「株式会社日本電報通信社」（通称「電通」）を設立，前二社を吸収・併合し，日本初の本格的な広告代理業・通信業を確立した。『新聞総覧』の前身に，星郎の弟眞三が編集した『廣告寶典 成功之恩師』隆文館，明38<YDM43536>，『新聞名鑑』日本電報通信社（第1版は明治40年刊，国立国会図書館では第2版，明治42年刊を所蔵）<YDM101741>がある。両書とも山本武利・有山輝雄監修『新聞史資料集成 明治期編 8 便覧・目録 II』ゆまに書房，1995<UC126-E37>に複製・収録されている。光永について，八火翁伝記編集委員会編『八火伝』日本電報通信社，1950（八火光永星郎翁年譜：pp.329-343）<GK84-16>を参照のこと。

- 3) ハワイでは，真珠湾攻撃直後「全般命令第14号 *General Order No. 14*」（1941年12月10日付，現地時間，以下同）により，邦字刊行物が発行停止になるまで，日刊4紙・週刊紙8～9紙の邦字新聞が発行されていた（本号525. 山下「ハワイ邦人言論機関発達史(上)」p.28（開戦当時現存した主なる日系新聞），526. 田村・白水「ハワイ日系プレス小史(中)」p.170（日米開戦時の主なる日系プレス）及び529. 田丸『ハワイに報道の自由はなかった』pp.13-14等参照）。各論稿の紙数（紙名）の相違は，下表に示す理由によるものである。

（○は対象としたもの，×は対象としなかったもの。（ ）内は記載内容等）

紙名	525. 山下	526. 田村・白水	529. 田丸	454. Chapin
コナ反響*1	×	×	○	In Japanese only 1908-1925.
実業之布哇	○（ホノルル／ 頻度記載なし／ 元雑誌）	○*3（ホノル ル／週刊／元月 刊）	×（月刊雑誌と して扱う）	Honolulu, monthly, 8 June 1937-5 Dec 1941.*2
布哇サンデー ニュース	×	○*3（ホノル ル／週刊／1941 年創刊）	×	Hilo, weekly on Sun, 1925-7 Dec 1941.

*1-『コナ反響』（1897年創刊）は，1925年以降英文欄を設けたが，1940年6月20日，日本語版を廃止し完全に英字紙となった。

*2-Began as a magazine in 1911; became a newspaper in 1937.

*3-田村・白水「ハワイ日系プレス小史(下・前篇)」pp.178-180（開戦前ハワイにおける日系新聞・雑誌）では，『コナ反響』を加え，『実業之布哇』を雑誌に分類（新聞型総合雑誌），『布哇サンデーニュース』については記載しておらず，田丸と同じ紙名・紙数となっている。

その後ハワイでは，「全般命令第40号」（12月22日付）で，『日布時事』及び『布哇報知』の発行停止を解き，「全般命令第49号」（1942年1月6日付）で両紙の再刊を許可している。その理由として，田丸は，両紙を「御用新聞」化し軍政を日本人社会に徹底させるため，だとしている（529. 田丸『ハワイに報道の自由はなかった』pp.15-17）。また米本土では，「軍事地域 *Military Area*」から外れていた，いわゆる山東・山中部において，『ロッキー新報』（『ロッキー日本』→，コロ

ラド州デンバー), 『^{コロラド・タイムズ}格州時事』(コロラド州デンバー) 及び『ユタ日報』(ユタ州ソルトレークシティ) の邦字3紙, 並びに「全米日系市民協会(JACL) *Japanese American Citizens League*」の機関紙(英語) 'Pacific Citizen' (ユタ州ソルトレークシティ) が, 戦時中も継続発行された。太平洋戦争と日系紙発行の経緯につき, 例えば, 本号539. 水野剛也「日系アメリカ人立ち退き・収容におけるアメリカ政府の邦字紙管理政策 一九四一〜一九四二」『マス・コミュニケーション研究』56, pp.174-189参照。また, 鶴谷寿「太平洋戦争と日本語新聞」『中日新聞』1978年12月7日夕刊, が簡便に纏めている。

- 4) 449-451各版を通じ, 掲載されている日系紙は以下のとおりである(紙名ママ, 概ね創刊順)。

ハワイ: 布哇新報/日布時事/コナ反響/加哇新報/布哇毎日/馬哇新聞/布哇報知/火山/布哇日報/馬哇レコード/布哇朝日新聞/洋園時報/新時代/週刊布哇新報/日曜タイムズ

アメリカ本土: 新世界新聞/日米新聞/日米時報/北米時事(シアトル, 1902)/ユタ日報/羅府新報/央州日報/櫻府日報/大北日報/紐育新報/格州時事/中加時報/北米評論/南沿岸時報/加州毎日新聞/ニッポンとアメリカ/コースト時報/北米時事(サンフランシスコ, 1936)/南加時報

カナダ: 加奈陀日々新聞/大陸日報/民衆

- 5) Helen G. Chapinには, 本号530. *Shaping History: The Role of Newspapers in Hawai'i*. のほかに次のような論稿がある。“Newspapers of Hawai'i 1834 to 1903: From He Liona to the Pacific Cable.” *The Hawaiian Journal of History*, 18: 1984, pp.47-86., “From Makaweli to Kohala: The Plantation Newspapers of Hawai'i.” *The Hawaiian Journal of History*, 23: 1989, pp.170-195.

- 6) 【日系新聞の所在について】日系新聞については, 田村紀雄・白水繁彦ら「日系新聞研究会」(下掲注10参照)のメンバーにより精力的な調査・研究がなされ, 日系新聞の「総合所蔵目録」の作成が積年の課題となっていた。田村紀雄「日系新聞の総合所蔵目録づくり」『季刊海外日系人』11: 1982.5, p.7<Z3-1360>, 144. 田村・白水編『米国初期の日本語新聞』(田村紀雄「はじめに」及び「共同方法の方法論」p.415)を参照。1981年から始まったこの作業は, 既に終了したものである。この目録が公開される。この目録が公開されていない現況下では, 日本国内, ハワイ及び北米における日系新聞の所在・所蔵状況については, 各機関のオンライン目録のほか, 例えば下掲の所蔵目録を個別に検索するほかに手段はない(同種の目録については最新のものを収録)。

○国立国会図書館収集部編『国立国会図書館所蔵国内逐次刊行物目録』平成9年末現在, 国立国会図書館, 1998<UP15-G9>

○国立国会図書館収集部編『国立国会図書館所蔵国内逐次刊行物目録 追録』平成10年1月-平成11年6月, 国立国会図書館, 1999<UP15-G15>

- 国立国会図書館編集・制作『NDL CD-ROM Line 国立国会図書館所蔵逐次刊行物目録』1999年末現在, 国立国会図書館, 2000 [電子資料] <YH21-1406>
- 国立国会図書館逐次刊行物部編『全国マイクロ新聞所蔵一覧』昭和62年, 国立国会図書館, 1988<UP67-13>
- 国立国会図書館逐次刊行物部編『全国複製新聞所蔵一覧』平成5年7月1日現在, 国立国会図書館, 1994<UP15-E124>
- 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫編『明治新聞雑誌文庫所蔵新聞目録』東京大学出版会, 1977<UP15-164>
- 『和歌山市民図書館所蔵移民資料目録 和文篇 1』1985<D1-421>(前掲158)
- The Japanese in Hawaii : An Annotated Bibliography of Japanese Americans. 1975.<岸-730><移(四)-Y11>(前掲178)
- A Buried Past : An Annotated Bibliography of the Japanese American Research Project Collection. 1974.<D1-207><岸-702>(前掲183)
- Ichioka, Yuji, and Azuma Eiichiro, comp. A Buried Past II : A Sequel to the Annotated Bibliography of the Japanese American Research Project Collection, 1973-1998. Los Angeles : UCLA Asian American Studies Center Pr., 1999.<未所蔵>
- Fading Footsteps of the Issei : An Annotated Check List of the Manuscript Holdings of the Japanese American Research Project Collection. 1992.<移(四)-Y2>(前掲184) *本書のIndexを除いた部分 'Finding Aid for the Japanese American Research Project Collection of Material about Japanese in the United States, 1893-1977 (Collection 2010)' unedited versionが, UCLA Library, Department of Special Collectios のホームページで検索できる (<http://www.library.ucla.edu/libraries/special/scweb/> → <http://www.oac.cdlib.org:80/dynaweb/ead/...>)。
- Sources for Researching the History of Japanese Canadian in British Columbia in the Special Collections and University Archives Division. 1991.<特別資料課事務用>(前掲194)

なお, 2000年10月横浜に開館した「日本新聞博物館(ニュースパーク)」所蔵の, いわゆる「羽島コレクション」にも昭和初期「戦前の新聞」約50種ほどが収蔵されていると思われるが, 日系紙のタイトルにつき未確認である(羽島知之『羽島コレクション 新聞関係資料目録』1959, p.38<070.31-H417h>, 町田市立博物館編『明治の新聞展 羽島コレクション』1986, p.72<UC126-E19>, 羽島知之編著『写真・絵画集成 新聞の歴史 1』日本図書センター, 1997, pp.56-59<UC126-G10>, 羽島知之「新聞博物館に入る『羽島コレクション』」『日本古書通信』62(8):1997.8, pp.5-8<Z21-160TO#>等参照)。

一方アメリカでは, 1983年, 'National Endowment for Humanities' (<http://www.neh.fed.us/>) 後援による 'United States Newspaper Program (USNP)'

(<http://www.neh.fed.us/preservation/usnp.html>) が、植民地時代以降アメリカで発行された、現存するあらゆる新聞の所在及び所蔵を目録化し、主要なものをマイクロフィルム化するプロジェクトに着手した。この計画は、全米50州、ワシントンD.C.及び信託統治領の責任館各1館、'National Newspaper Repositories' 8館、並びに Library of Congress において実行されたが、2001年2月末現在、参加62館中46館がプロジェクトを完遂している。この目録は、各参加館(各州)のオンライン目録で検索できるほか、'Online Computer Library Center (OCLC)' の '**United States Newspaper Program National Union List**' により横断的に検索することができる。州によっては冊子体で 'Union List' を刊行しており、OCLCからはマイクロフィッシュ版による 'National Union List' も刊行されている(現在, 5th ed.)。アメリカにおけるアジア系移民新聞の利用・保存と USNP のプロジェクトについて、Chiu, Kuei. "Access to the Past of A Nation of Immigrants : Asian Language Newspapers in the United States." *Journal of East Asian Libraries*, 112 : 1997.6, pp.1-8. <Z55-B307-TO>参照。

また日本においても、1997年度から、国立国会図書館が「全国新聞総合目録」データベース・システムの開発に着手している。このデータベースでは、公立図書館・大学図書館等国内約1,300機関が所蔵する、あらゆる新聞の原紙・復刻版・縮刷版・マイクロ資料等約18,400件の所在・所蔵状況を検索することができる。既にデータ入力及び検証作業を終了しており、国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) での公開が予定されている。本データベースによって、アメリカで発行された164件の日系紙(邦字紙及び英字紙)、カナダ13件(邦字紙のみ)の参加館での所蔵が確認されている。

ハワイで発行された新聞を検索するツールとして、これまで、McMillen, Sophia and Nancy Morris. *Inventory of Newspapers Published in Hawaii : Preliminary List*. Honolulu, n. d. 及び、OCLC の 'USNP National Union List' からプリントアウトした *Hawaii Newspapers : Union List*. Honolulu : Hawaii Newspaper Project, 1987. 等があったが、Chapin, *Guide to Newspapers of Hawai'i : 1834-2000*. の刊行により、ハワイの日系新聞に関しては、所在も含めその情報が簡便に得られるようになった。

- 7) 各エントリー中、氏名等日本語のヨミが正しく英語表記されていないか、または、誤植があることに注意を要する。例：小野目文一郎(『日本週報』創刊)→B. Oname, 注ではOnomeと正しく表記。大石光之助(『静岡新聞』社長、『ハワイ報知』経営)→Konosuki Oishi。
- 8) 「日系新聞研究会(JANP) *Japanese American Newspaper Research Project*」は、田村紀雄編著『地域メディア ニューメディアのインパクト』日本評論社, 1983 <EC235-99>執筆の「地域メディア研究チーム」メンバーを核として、日・米・加の研究者約20名の参加を得て、1981年に正式に発足した。1982年からはニューズレター『日系新聞研究資料』を発行。「日系新聞研究会」の初期の活動状況

- は、田村・白水編『米国初期の日本語新聞』(144)所収の田村紀雄「共同研究の方法論」(「7 日系紙研究会の足跡」pp.415-421)及び「資料」(pp.429-434)が詳細に記録している。山田「北米日系新聞関係日本語文献表(第1稿)」(211)が、「日系新聞研究会」会員の1993年までの研究成果を概ね網羅しており、これをインターネット上で更新していることは、本文で述べたとおりである。「日系新聞研究会」は、田村紀雄・白水繁彦・阪田安雄らを中心にして、これまで三冊の共同研究書(144. 田村・白水編『米国初期の日本語新聞』1986, 137. 新保[ほか]『カナダの日本語新聞』1991, 463. 田村編著『正義は我に在り』1995)を刊行し、また、「在米日系新聞の発達史研究」シリーズを『東京経済大学人文自然科学論集』に(109号:2000年3月刊行時で26回)、「日系新聞研究ノート」シリーズを『東京経大会誌』に(184号:1993年11月刊行時で16回)発表している。これらの論稿のなかには、加筆修正されて上掲共同研究書等に収録されてものも多い。この間の研究推移を見るに、また、本稿収録文献に「エスニック・メディア」「エスニシティ」等という言葉が散見されることも考慮するに、最近の「日系新聞研究会」の関心が『「日系新聞」に限らず、広くエスニシティ問題一般に向けられているよう』であると指摘していることは、移民研究一般の趨勢と一致するものであると思われる(211. 山田書, p.258)。
- 9) 「明治新聞雑誌文庫」の概要について、北根豊「東京大学明治新聞雑誌文庫その設立過程と資料収集」国立国会図書館編『新聞の保存と利用 第2回資料保存シンポジウム講演集』日本図書館協会, 1991, pp.141-151<UL755-E6>及び、宮武外骨『公私月報』1-50号<雑14-41>(1-109号・臨時号外, 巖南堂書店, 1981(複製版)<Z21-2326>)等を参照。本文庫の所蔵目録『東天紅 東京帝国大学法学部明治新聞雑誌文庫所蔵目録』<R050.3-To46ウほか>は夙に有名。本書の姉妹書として『日本欧字新聞雑誌史』大誠堂, 昭和9(付:東亜大陸欧字新聞雑誌史)(日本欧字新聞雑誌創刊改題年表:pp.277-289)<070.21-E16n>, 名著普及会, 1980(昭和9年刊の複製)<UC126-37>がある。
- 10) 例えば、藤野「北米における初期日系新聞をめぐる諸問題」(455) p.119, 田村・飯田「ハワイ初期の日本語新聞」(527) pp.83-84, 飯田「ハワイ・日系キリスト教会の草創期の機関紙」(528) p.34等を参照。
- 11) 高須正郎「アメリカ3都市の日系新聞」『日本新聞協会研究所年報』1977年度2号:1978.8, pp.43-51<UC111-8>及び「アメリカー西海岸・ハワイの邦字新聞視察記」『総合ジャーナリズム研究』15(4):1978.10, pp.38-47<Z6-8>は、「聴きとりでつづる新聞史 海外編」の取材記録。併せて参照されたい。
- 12) 本書の意義を十分に評価したうえで、遠藤泰生「書評『米国初期の日本語新聞』」『比較文学研究』53:1988.4, pp.146-150<Z12-76>は、比較文学・比較文化研究の視点から、「日系新聞」のみを資料とすることに内在する問題点を指摘している。
- 13) 詳しくは、Janowitz, Morris. *The Community Press in An Urban Setting*.

- Glencoe : Free Pr., 1952. pp.29-35. ('The Decline of the Immigrant Press') <071.73-J34c>, 2nd ed. Chicago : Univ. of Chicago Pr., 1967. <未所蔵>参照。
- 14) 『ユタ日報』廃刊時(1991年)の読者調査を基に、日本語新聞の存在意義を分析する、東元「『ユタ日報』最後の読者」『新聞研究』495 : 1992.10, pp.90-96<Z21-88>, 及び「『ユタ日報』最後の読者たち」田村紀雄編『復刻「ユタ日報」(一九四〇〜一九四五)』五月書房, 1992, pp.387-392<YP21-97>も参照のこと。
 - 15) 在日エスニック・メディア42紙誌を詳細に紹介する、森口秀志『エスニック・メディア・ガイド』ジャパンマシニスト社, 1997<UC126-G14>も参照のこと。
 - 16) エスニック・メディアの発展と変容につき、町村の一連の論稿「エスニック・メディア研究序説」『一橋論叢』109(2) : 1993.2, pp.191-209<Z3-104>, 「エスニック・メディアの歴史の変容—国民国家とマイノリティの二〇世紀」『社会学評論』44(4) : 1994.3, pp.416-429(情報化社会の中のエスニシティ<特集>) <Z6-265>, 「ロスアンジェルス日本系コミュニティの成立と展開—グローバル化時代における想像力としての『地域社会』」『地域社会学会年報』9 : 1997.5, pp.71-105(<地域・空間>の社会学) <Z6-4345>, 及び玄武岩「グローバル時代における『ナショナル・メディア』の台頭—エスニック・メディアの発展と変容」『東京大学社会情報研究所紀要』59 : 2000.3, pp.155-183<Z21-98>等を参照。これらの研究動向は、日系移民研究が、アジア系アメリカ人の枠組みへ、また各マイノリティ間の相互関係へと、引照基準をシフトする趨勢と軌を一つにするものであろう。
 - 17) イ ヨンスク「町村敬志『越境者たちのロスアンジェルス』—『回収』と『順応』と『越境』の終わりなき営み」『論座』52 : 1999.8, pp.266-268<Z24-B125>は、「アジア系アメリカ人」に関する記述が少ないことが残念であるとし、更なる研究を期待している。
 - 18) この年次総会の概要は、海外日系新聞協会編集『季刊海外日系人』(1977年5月創刊) <Z3-1360>に「海外日系人大会」の概要とともに報告されている。季刊海外日系人編集委員会「海外日系人協会の歩み」『季刊海外日系人』6 : 1979.10, pp.13-18(第20回海外日系人大会記念特集) <Z3-1360>を参照のこと。
 - 19) 蒞蕪版に始まる日本語新聞の印刷技術、就中「活字」の転変には幾多の物語がある。事実関係の細部において不明な点があるものの、例えば、岡繁樹が経営した「金門印刷所」・『桜府日報』の活字は、アメリカ共産党日本人部機関紙『労働新聞』(→『同胞』)の印刷に使用されたが、戦時中はそれぞれ、米国政府の対日宣伝文書・ビルマ戦線の対日宣伝ビラの印刷に転用され、戦後は、藤井寮—ら日系左翼によって『シカゴ新報』(1945年11月創刊)の印刷に使われた。462. 田村『アメリカの日本語新聞』(『日本町と新聞の奇跡の復興』pp.222-225)及び、岡直樹「兄岡繁樹の生涯」岡直樹〔ほか〕編著『祖国を敵として 在米日本人の反戦運動』明治文献, 1965, pp.3-24<289.1-O416Os> (445. 田村編著『海外ヘユートピアを求めて』に抄録, 「桑港の日系SRと兄・岡繁樹」pp.83-90)等参照。ビルマ戦線で

は岡繁樹自身が対日宣伝ビラの殆どを執筆、祖国日本を敵として宣伝活動に従事した。岡自身が語るこの間の経緯及び岡が執筆したとされる文書が、上掲『祖国を敵として』に収録されている(岡繁樹「遺稿」、藤原彰・解説「ビルマ戦線の反戦文書」)。平和博物館を創る会編『紙の戦争・伝単 謀略宣伝ビラは語る』エミール社、1990<GB531-E74>は、アメリカ軍及びイギリス軍が作成した「伝単」(戦時対敵チラシ)の写真を収録し、岡ら日系人の対日宣伝行動の経緯について概観する。(岩倉務「日本とアメリカの心理戦・伝単について(解説)」pp.198-206)。また、芳賀武らが、1944年『紐育時事』(1945年『北米新報』→『ニューヨーク日米新聞』)創刊に使用した活字は、「敵国財産」として没収された、星一の『日米週報』(→『日米時報』)の活字を買い取ったものであった。芳賀武「ニューヨークの邦字紙について」「聴きとりでつづる新聞史 海外編 II」『別冊新聞研究』17, pp.2-4, 白水繁彦「エスニック・メディアの送り手—『北米新報』『ニューヨーク日米新聞』を始めた人たち、支えた人たち」田村紀雄監修『ニューヨーク日米新聞(一九四五～一九五二) 敗戦後日系社会の情報機関紙 重要紙面・縮刷版』五月書房、1996, pp.8-16<UC151-G2>, 田村[ほか]『紐育日系新聞小史』(534) pp.130-140, 田村紀雄「反ファシズムの新聞『同胞』」田村編著『正義は我に在り』(463) pp.269-308, ほか, 等参照。一方、『ユタ日報』及び『ヒロタイムス』の活字が、それぞれ松本市(1993年,「松本市立中央図書館」収蔵), 凸版印刷(1998年,「印刷博物館」収蔵)に寄贈, 寄託され, 日本に里帰りしている。

20) 前掲91. ヒロタイムス [大久保清] 編『ハワイ島日本人移民史』pp.265-264, 本号474. 坪井書, pp.233-248を参照。

21) 『日本週報』については、その第18号(1892年9月26日発行)が、321. 川添樫風『移植樹の花開く』1960等に内容が詳しく紹介され(p.184-188), 328. 王堂・篠遠『図説ハワイ日本人史 1885-1924』1985に表紙の写真が掲載されている(p.145)。しかし結局、坪井はこの第18号の存在を現認できず、第35号を確認することになった(1997年)。しかし、ハワイ州立公文書館所蔵の『日本週報』第35号は近年の発見・収蔵とは思われず、これがなせもう少し早い時期に、研究者によって確認されなかったのか、第18号の行方とともに不思議である。

ハワイ最初の日本語新聞である『日本週報』は、『やまと』『やまと新聞』『日布時事』『布哇タイムス』と連綿と続く、まさにハワイ日系紙の嚆矢であるが、現存しない後継紙もあり、その変遷については定かでない。526. 田村・白水(上) pp.80-81, 528. 飯田p.18等を参照。田村・白水は、本号524. Sakamaki論文に拠り、他説として、前山北海「年輪：ペンを担いで50年」『East-West Journal』1980年連載(国立国会図書館では、1985.11.1~所蔵<Z98-35>)を紹介している。飯田もまた、田村・白水とは幾分異なった立場をとっている。本経緯についてのキーパーソンとして、ハワイはじめテキサス(米作事業)・ブラジル(1916年, 最初の邦字新聞『南米』創刊)等で活躍した星名謙一郎がいる。星名について、飯田耕二郎「移民の先駆・星名謙一郎の生涯」『キリスト教社会問題研究』32:

1984.3, pp.146-172<Z9-77>, 及び「明治期・テキサスの日本人米作者—西原清東・片山潜・星名謙一郎をめぐって」『同志社時報』59:1976.11, pp.50-54<Z7-42>があるが、ハワイにおける新聞発行の経緯については未詳である。また、蛭原は『日伯新聞』がブラジル最初の邦字新聞であるとし、(1916年(大5)8月31日創刊、「年表」には月日記載なし)これに対抗して『南米』が創刊されたが、永続しなかったとしている(143.蛭原書, p.225)。しかし内山勝男は、『南米』がブラジル最初の日本語新聞であるとし、『南米』と『日伯新聞』の創刊経緯を書いている(内山勝男『舞樂而留ラプソディ』PMC出版,1993, p.56<DC812-E161>)。内山が『南米』第113号(1918年3月3日発行)を所有していることから、蛭原説は誤りであると思われる。内山書は、「日本語新聞崎人伝」『「ジャカレー」こと星名謙一郎「御用新聞の撰り込み」(pp.48-69)において、星名について記述しているが、ハワイにおいて星名が「どの新聞とかかわったのかは、はっきりしない。」としている(同書, p.57)。

- 22) 奥村の新聞事業につき、田村・飯田「ハワイ初期の日本語新聞 1880~1930.キリスト教会を中心に」(527), 及び飯田「ハワイ・日系キリスト教会の草創期の機関紙」(528) (「4 奥村多喜衛牧師の諸活動と新聞事業」pp.27-34)を参照のこと。また、奥村の初期の業績の紹介、自叙等著作につき、以下のものを参照されたい。警醒社編『信仰三十年基督者列伝』警醒社書店, 大10<392-252>(大空社, 1996, 伝記叢書 211<HP4-G2>に復刻・再録), マキキ聖城教会編『奥村牧師説教集』ホノルル, マキキ聖城教会, 1955(マキキ聖城教会創立五十周年記念)<山本-14>, 奥村多喜衛(以下全て奥村編・著)『成功の生涯』警醒社, 明36<YDM10704>, 『日曜講話 第1編, 第2編』警醒社書店, 大4<360-132><山本-103>, 『太平洋の樂園』三英堂書店, 大6<325-253>, 増補改版, 1926<297.6-O623t-(s)><山本-154>, 『布哇傳道三十年畧史』ホノルル, 奥村多喜衛, 1917<山本-450>, 『布哇に於ける日米問題解決運動』奥村多喜衛, 大14<524-343><山本-425>, 4版, 昭7<524-343イ>, 5版, 1935<移(一)-355>, 『恩寵記略』ホノルル, 奥村多喜衛, 1933<山本-320>, 『恩寵七十年』ホノルル, 奥村多喜衛, 1935<移(四)-66>, 『回顧四十年』奥村多喜衛, 1935<未所蔵>, 『樂園おち葉』1-31箒, 1941-50<山本-247>。
- 23) 奥村多喜衛・相賀安太郎, 牧野金三郎の日本人コミュニティにおける「適応のストラテジー」については、本号468・481.白水論文等においても検証されている重要なイシューである。ドウス昌代『日本の陰謀 ハワイオアフ島大ストライキの光と影』文藝春秋, 1991<DC812-E115>, 1994(文春文庫)<DC812-E192>は、オアフ島大ストライキが「排日移民法」(1924年)へと帰結する過程での、三人の動向を鮮やかに再現している。342. Kotani書, 'Chapter 3 Strike'(pp.33-46) 及び 530. Chapin 書, pp.118-125, 131-139及び140-147も参照のこと。
- 24) 「排日予防啓発運動」「日系市民会議」等、奥村の「米化運動」につき、474-476 論稿と異なる評価をするものも含め、337. Ogawa, Kodo no Tame ni.<DC812

- 20ほか>, 342. Kotani, The Japanese in Hawaii.<DC812-A30ほか>, 345. Okihiro, Cane Fires.<未所蔵>, 346. Tamura, Americanization, Acculturation, and Ethnic Identity.<EC136-A84>, Nomura, Gail M. “The Debate Over the Role of Nisei in Prewar Hawaii: The New Americans Conference, 1927-1941.” *Journal of Ethnic Studies*, 15 (1) : Spr. 1987, pp.95-115.<未所蔵>, ドウス昌代『日本の陰謀』<DC812-E115ほか>, 吉田亮「奥村多喜衛の日系市民会議」, 沖田行司「奥村多喜衛と日本語学校問題—外国語学校取締法成立に至るまで」同志社大学人文科学研究所編『ハワイにおける日系社会とキリスト教会の変遷』1991 (サントリー-財団文化助成報告書)<未所蔵>等を参照のこと。
- 25) ‘Kona Echo’ 廃刊後, Dixon は1951年10月に ‘Big Islander’ (‘Koko Nuts’→) を創刊したが, これも短命に終わった (1952年1月廃刊)。454. Chapin書, p.11, 530. Chapin 書, pp.224-226参照。
- 26) 林三郎の著作, 『布哇実業案内』コナ反響社, 明42<YDM42049><山本-226>, 増田禎司共編『布哇島一周』コナ反響社, 1925<297.6-H385hほか><山本-148><移(四)-35>も参照のこと。また, 『コナ反響』発行を手伝った大久保清は, 自ら主宰した『ヒロタイムス』に, 林に関する記事を多数掲載している。
- 27) このほか中野には, 『ホノム義塾 曾我部四郎伝』中野好郎, 1985 (Samurai Missionary: The Reverend Shiro Sokabe. Honolulu: Hawaii Conference of the United Church of Christ, 1984.<未所蔵>の翻訳)<HP112-E2>, 『カウボーイ木村寛』中野好郎, 1992 (Parker Ranch Paniolo: Yutaka Kimura. Honolulu: United Japanese Society of Hawaii, 1992.<移(四)-Y48>の翻訳)<GK74-G8>等の日系移民に関する著作がある (文学作品を除く)。
- 28) 相賀の文筆活動につき, 例えば以下のものを参照のこと。『布哇その折り折り』ホノルル, 日布時事社, 1926, <山本-25><移(四)-88>は, 1946年8月から『日布時事』に連載された, ハワイの事物や出来事を題材とした随筆集。『鉄柵生活』布哇タイムス社, 1948<移(四)-87>は転々たる抑留4年間の状況並びに心境を綴る貴重な記録。その間の短歌は, Soga, Keiho, [et al.]; edited and translated by Jiro Nakano, Kay Nakano. *Poets Behind Barbed Wire: Tanka Poems*. Honolulu: Bamboo Ridge Pr., 1983.<未所蔵>に英訳, 収録されている。『布哇タイムス』に連載した「折りに触れて」及び「随想随話」は「布哇邦字新聞紙上切っての好文字として絶賛を博し」た。「潮音詩社」同人としての歌歴は, 『夜開花』ホノルル, 潮音詩社, 1923<未所蔵>に, 相賀誠編『溪芳歌集』ホノルル, 相賀誠, 昭32<山本-128><移-77>は, 「潮音詩社」歌友の追悼歌も収録した遺歌集。その他, 『葦の匂ひ』1925<山本-74>, 『日満を覗く』1935<山本-89>等朝鮮・満州への旅行記もある。
- 29) 大久保には次のような編・著書がある。何れも独特の言い回しの中に, 大久保版「ハワイ日本人移民史」が綴られている。『ハワイ島日本人移民史』(91), 『知られざる日布交流史』(351), 『関東大震災とハワイ-1923-』ヒロ, ハワイ島日本人移

民資料館, ヒロタイムス新聞社, 1980<移(四)-75>。また, かつてホノルルの日本語放送局「KZOO」で担当した「ハワイ島日本人移民資料館アワー」は, 往時のハワイ日系社会を話題とし興味深い(国立国会図書館では1993-94年放送(部分)の録音カセット12巻(23回分)を所蔵<録音資料-ハワイ-88~89>)。

- 30) 皇国の烈士・志士としての横川の姿を伝えるものは, 例えば以下に掲げるように多い。松島宗衛『烈士横川省三』烈士横川省三銅像建設会, 昭3<578-193ほか>, 利岡中和『真人横川省三伝』大空社, 1996(伝記叢書224)『真人横川省三伝』刊行会, 昭10年刊<未所蔵>の複製<GK162-G7>, 満鉄弘報課『横川省三爆破行』満州日日新聞社, 1941(大陸開拓精神叢書9輯)(紀元二千六百年記念出版)<GE357-E40>, 萩原新生『決死の密偵行 国威宣揚物語』皇国青年教育協会, 1942<GK162-21>, 伊藤峻一郎『志士の生涯 横川省三伝』興亜書院, 1944<289.1-Y691Is>, 池野藤兵衛編著『明治の青春横川省三 日露戦争と志士群像』牧野出版, 1980<GK162-34>, 池野藤兵衛記『横川省三と其の時代』池野藤兵衛, 1990<GK162-E20>。このほか, 『岩手の先人100人』岩手日報社, 1988(『大陸の露と消えた愛国の志士 横川省三』pp.85-87)<GK13-E83>, 横田順彌『明治不可思議堂』筑摩書房, 1995(『嗚呼! 殉国の勇士』pp.51-56)<GB415-E52>, 1998(ちくま文庫), pp.60-66<GB415-G18>, 才神時雄『メドヴェージ村の日本人墓標 日露戦争虜囚記』中央公論社, 1983(中公新書)(『蒙古へ潜行するする志士たち/志士・横川, 沖, ハルビン刑場に消ゆ』pp.39-50)<GB441-90>(446.日本ペンクラブ編『海を渡った日本人』福武書店, 1993(福武文庫), pp.164-174<DC812-E152>に再録)等も参照のこと。名記事と謳われた横川の「威海衛夜襲」及び「三陸沖大津波」の記事が, 朝日新聞社編『朝日新聞100年の記事にみる8特ダネ名記事』朝日新聞社, 1979<GB411-88>(『朝日新聞の記事にみる特ダネ名記事[明治]』1997(朝日文庫)<GB411-G44>)に再録されている。ヒロタイムス[大久保清]編『ハワイ島日本人移民史』(91)が, ハワイにおける横川の知られざる一面を追想する(pp.267-274)。
- 31) 「ヤマト・コロニー」と呼ばれる農業コミュニティは, 米本土に少なくとも3ヶ所は存在した。これらの「ヤマト・コロニー」につき, 153. Niiya, ed. Japanese American History. 1993, pp. 356-357. 及び増補版, Encyclopedia of Japanese American History: An A-to-Z Reference from 1868 to the Present. up dated ed. New York: Facts on File, 2000. pp.419-420.<未所蔵>を参照。更に詳しくは以下のものを参照のこと。安孫子のコロニー(カリフォルニア州)につき, Noda, Kesa. Yamato Colony: 1906-1960. Livingston: Livingston-Merced Chapter, JACL, 1981.<移(四)-Y25>, 及び388. 佐渡『カリフォルニア移民物語』(『第五章 カリフォルニアの『大和殖民地』』pp.170-210)<DC812-G107>, 鷺津尺麿「歴史涇滅の嘆」93-96『日米新聞』1922年(大11)7月10日~連載, 岡省三「安孫子久太郎伝」『北米毎日新聞』1980年5月~連載(445. 田村編著『海外へユートピアを求めて』pp.91-99に抄録)等々。なお, 「アメリカ国立公園協会

- (NPS) *The National Park Service*」のホームページ ‘ParkNet’ (<http://www.nps.gov/>) が、‘Five views : A History of Japanese Americans in California’ のサイトで ‘Yamato Colony’ の誕生から現況までを紹介している。フロリダ州の「ヤマト・コロニー」につき、Pozzetta, George E. and Kesey, Harry A. “Yamato Colony : A Japanese Presence in South Florida.” *Tequist*, 36 : 1976, pp.66-77.<未所蔵>。テキサス州の「ヤマト・コロニー」につき、396. Walls, *The Japanese Texans*.<移(四)-Y26> (邦訳, 397『テキサスの日系人』<DC812-G50>)。
- 32) 安孫子久太郎・余奈子夫妻と星一 (1899年, ニューヨーク初の邦字紙『日米週報』創刊) との数奇な関係につき、462. 田村『アメリカの日本語新聞』pp.175-180, 及び492. 蒲池「ニューヨークにおける星一の新聞・雑誌活動」田村・白水編『米国初期の日本語新聞』pp.324-325参照。
- 33) 「日記」(1891-1944年)をはじめ、余奈子の個人文書を中心とする ‘ABIKO FAMILY PAPERS.’ が ‘UCLA・JARP コレクション (Collection 2010)’ に収蔵されている。また同じく、社会主義者で「金門印刷所」経営者、岡繁樹 (1878-1959, 『アメリカ新聞』『桜府日報』等を発行) 関係文書 ‘OKA PAPERS. 1914-1957’ に、岡が安孫子の伝記を編纂する目的で集めた、翁久允ら関係者の追悼草稿類が含まれている。安孫子の伝記は結局出版されなかったが、これらの資料を基に岡の甥、岡省三が『北米毎日新聞』(安孫子の『日米新聞』のライバル紙、『新世界新聞』の後継紙) に「安孫子久太郎伝」を連載し、後年の研究者が依拠する資料となっている。
- 34) 安孫子の「永住論」と『日米新聞』につき、398. Ichioka, *The Issei*. ('Chapter V Permanent Settlement' pp.146-175) (邦訳, 399『一世』, 「第四章 永住」 pp.163-195) も参照のこと。
- 35) 河上清につき前掲、『参考書誌研究』No. 52, p. 30,74参照のこと。前号注22) で河上の生年を1879(明12) と記したが (典拠 : 398. Ichioka, *The Issei*. p.190, 邦訳 399.『一世』 p.211, 及び153. Niiya, ed. *Japanese American History*. pp.197-198, 増補版, *Encyclopedia of Japanese American History*. updated ed. 2000. pp.237-238も同記述), 古森『嵐に書く』(490) が河上の戸籍も調査しており、また ‘UCLA・JARPコレクション (Collection 2010)’ 収蔵 ‘KAWAKAMI FAMILY PAPERS. ca. 1906-1949’ 解題も1873年としている (184. Sakata, comp. *Fading Footsteps of the Issei*. p.113)。これらに拠り、1873年(明6) と訂正する。なお、河上の著作につき、『参考書誌研究』No. 52, p.74に加えて、490. 古森書の「日本語の主要著書、英文の著書」リストも参照のこと。
- 36) 星一についての纏まった評伝は、本文で記したように491が唯一のものであるが、文献案内として、491. 大空社版 (1997. 伝記叢書 262) 所収の横田順彌「解説」、及び猪口崇「星一関連文献調査」『文献探索』1997 : 1998. 3, pp.22-28<Z71-B380>がある。とりわけ、星新一『人民は弱し官吏は強し』文藝春秋, 1967<

289.1-H686 Hz>,新潮社,1978(新潮文庫)<GK53-39>、『明治・父・アメリカ』筑摩書房,1975<KH152-114>,新潮社,1978(新潮文庫)<KH152-201>が,まず参照されるべきもの。三沢美和『『星一』言語録1,2,3』『葉史学雑誌』23(2):1988 pp.98-101,24(1):1989 pp.115-119,27(2):1992 pp.109-116が未収録なので掲げておく。また,横田順彌『快絶壯遊 [天狗倶楽部]—明治バンカラ交遊録』教育出版,1999(江戸東京ライブラリー 8)<KG311-G134>が,押川春浪の「天狗倶楽部」を中心に,文化人の交流史という視点から星を描いている(「第七章スリはホシの『三十年後』」pp.95-112)。『日米週報』の活字の転変については,本号注19)掲載文献を,安孫子久太郎・余奈子夫妻との関係については,注32)掲載文献を参照されたい。

- 37) 【渋谷清次郎】1878(明11)-1917(大6)／新潟県古志郡に,旧長岡藩士で富裕な染物業を営む,渋谷朝吉の長男として生まれる。旧制長岡中学を経て,1901年(明34),大日本帝国政治学校(俗称「新聞学校」)を卒業。フィラデルフィア大学留学を目指し渡米するが,何故か『新世界新聞』(1894年5月,副島八郎創刊)地方主任として,ロサンゼルス赴任。1902年4月,中学時代の友人山口正治らと『羅府新報』(週刊,1904年から日刊)を創刊。1906年,日本人で初めて南カリフォルニア大学法学部を卒業,その後「羅府野菜市場」設立(1906年),「南加州新潟県人会」創立(1910年,1915年まで会長)等,羅府日系社会の発展に貢献した。この間1908年からは,『羅府新報』のライバル紙『羅府毎日』の主筆を勤めている。病を押して編纂した『新潟県人会五周年記念帖』(ロサンゼルス,南加州新潟県人会,大5)脱稿後,不帰の人となる。
- 38) 【駒井豊策】1881(明14)-1950／山梨県東山梨郡日川町の名家に生まれる。生家没落・一家離散のため,1899年(明32)18歳の時,トランク一つでサンフランシスコに渡る。中部カリフォルニア,フレズノの農場で働いた後,ロサンゼルスでオレンジ栽培に成功,その資金をビジネスに投資した。旅館・レストラン経営をはじめ,メロン・苺栽培,鮑・ロブスター採集,日米銀行ロサンゼルス支店相談役等,実業面でも活躍,成功した。1909年に渋谷清次郎らが新設した野菜市場をめぐる日系社会は二分,新市場派の購読ボイコットにより,『羅府新報』は経営難に陥った。1911年,駒井は他の日本人起業家とともに『羅府新報』を買収,新聞人としての第一歩を踏み出した。1913年支配人,1922年社長に就任。「排日移民法」成立(1924年)の動向を見取り,1926年2月から「英語欄」を設け,二世もその視野に入れた編集方針をとった。1929年10月からの世界大恐慌による不況の中,数々の設備投資を行い,ライバル紙『加州毎日』(1931年,藤井整創刊,1992年廃刊)と鏑を削った。戦時中はサンタフェ収容所に抑留された。1946年1月1日,『羅府新報』は再刊されたが,その経営は長男明に任せ,爾來在米日本人社会のための事業に情熱を傾けた。駒井は,不偏不党の経営に徹し,その新聞人生において「一行の記事も書かなかった」という。
- 39) 【藤岡紫朗】1879(明12)-1957／青森県弘前市に生まれる。旧制弘前中学卒業後,

犬養毅の書生となり早稲田大学に学ぶ。1897年(明30)シアトルに渡る。サンフランシスコで清瀬規矩雄と知り合い、『新天地』に寄稿する等文筆活動を始める。その後ニューヨークに移り、コロンビア大学に学び、『紐育週報』(1897年創刊)で本格的な記者生活に入る(184. Sakata, *Fading Footsteps of the Issei*. ほか‘UCLA・JARPコレクション(Collection 2010)’解題では、『紐育新報』(1911年創刊)となっているが、藤岡自身が「『紐育週報』に二ヶ年間執筆し」としており(『民族発展の先駆者』「自序」)、年代・経歴から考えても『紐育週報』の誤りであると思われる。林『日系ジャーナリスト物語』も『紐育週報』としている(p. 137)。但し、『紐育週報』はいくらかも続かず廃刊したという記述もある(360. 紐育日本人会編『紐育日本人発展史』pp.408-409)。1905年、日露講和ポーツマス会議の『日本』(三宅雪嶺ら創刊)特別通信員を経て、シアトルの『北米時事』(1902年創刊)に招聘される。1914年(大3)、羅府日本人会の前身である南加日本人会書記長就任、爾来『南加中央日本人会 *Central Japanese Association of Southern California*』等、在米日本人団体の要職を歴任した。1920年代に『羅府新報』主筆として活躍、ライバル紙『加州毎日新聞』の藤井整をして「同胞間の第一人者一人格者」と評価せしめる程、在米日本人社会で評価された人物である。『民族発展の先駆者』同文社、昭2<561-69>、『米国中央日本人会史』(365)、『歩みの跡』(366)等の著作は、藤岡のジャーナリストとしての資質が十分に活かされた名著として、また信頼すべき資料集として、高い評価を得ている。また、‘UCLA・JARP コレクション(Collection 2010)’に‘FUJIOKA PAPERS. 1954-1959.’が収蔵されている。

- 40) 【坂井米夫】1900(明33)-1978/佐賀県佐賀市米屋町の米屋に生まれる。佐賀中学卒業後、関西学院大学文学部及び明治学院大学文科を何れも中退。国際情報社で『映画と演芸』の編集を担当し、1926年(大15)に渡米した。サンフランシスコで『日米新聞』(1899年、安孫子久太郎創刊)で働き、アメリカ各地を放浪、1930年ロサンゼルスに至る。『羅府日米』(1922年創刊、『日米新聞』姉妹紙)でアルバイトとして働くが、『日米新聞』ストライキが原因で退社。ロサンゼルス・オリンピック(1932年)取材のため、『東京朝日新聞』アメリカ特派員となり、開戦まで通信員・特派員として働いた。また『羅府新報』記者も兼務した。『東京朝日新聞』の「移動特派員 *roving reporter*」として「スペイン内戦」(1936-39年)等を取材し、国際記者としての地位を確立した。戦後は、『東京新聞』特派員として、敗戦国日本唯一の駐米記者として取材活動を続け、NHKの人気番組「アメリカ便り」にリポートを寄せた。坂井の経歴については、本書『日系ジャーナリスト物語』のほか、川成洋編『動乱のスペイン報告 ヴァガボンド通信——一九三七年』彩流社、1980<GG572-26>が、「スペイン戦争」とルポルタージュの傑作『ヴァガボンド通信』の経緯も踏まえ詳細である(「ヴァガボンド *vagabond*」は漂浪・さすらい人の意)。坂井の主な編・著書は以下のとおり。『ヴァガボンド通信』改造社、昭14<765-38>、『続ヴァガボンド通信』改造社、昭15<765-38>、『ヴァガボ

ンド・襄 板垣書店, 昭23<F13-Sa29ウほか>, 『アメリカ雑記帳』板垣書店, 1948<a295-3>, 『アメリカ便り 第2, 第3』名曲堂出版部, 1949<a295-6>, 『新アメリカ便り』名曲堂出版部, 1949<a295-6>, 『日系市民とYUKI』名曲堂出版部, 1949<a913-1106> (『日系市民YUKI』サンケイ新聞社出版局, 1969<KH525-2>), 『坂井米夫詩集』思潮社, 1966<911.56-Sa411s>, 『私の遺書』文藝春秋, 1967<049.1-Sa411w>, 平賀竜祐著・坂井米夫編『一本の釘』求龍堂, 1970<KC222-11>。(余談になるが, 横田順彌が古書店で購入した『ヴァガボンド通信』の393頁以降が脱落していたという。横田『雑本展覧会 古書の森を散歩する』日本経済新聞社, 2000, pp. 248-249<UM51-G19>。国立国会図書館所蔵『ヴァガボンド通信』も433頁以降を欠いている。)

- 41) 「密航者密告事件」(1920年代後半-1931年)では, 『羅府日米新聞』『南加タイムス』両紙上で「筆戦」が繰り広げられ, 結局, 南加中央日本人会の赤堀最, 梶井喜左衛門(『南加タイムス』社長)両参事らが密告の共謀者として除名処分となった。この事件を扇動した藤井整, 「村八分」にされた赤堀・梶井は, 日米開戦後, 在米日本人社会の指導者として逮捕され, 同じ抑留所内で共同生活を余儀なくされたという。この事件に関し, 阪田・田村(495), pp. 597-607, 阪田(496), pp. 127-138参照。‘UCLA・JARP コレクション(Collection 2010)’収蔵‘AKAHORI FAMILY PAPERS: ca. 1908-1965’は, JARPコレクション中最大の量を誇るものの一つであり多くの貴重な資料が含まれているが, この中に「密航者密告事件」関係資料17点が含まれている。
- 42) 藤井整に関しては, その経歴・業績に比して, 『米国日系人百年史』(80)『南加州日本人七十年史』(133)等のような浩瀚な在米日系人史においても, あまり多くは触れられていない。この理由として, 日系人社会におけるライバル紙及び指導者間の確執が指摘されている(494. 大野『羅府に斃る』pp. 280-283)。
- 43) 伊藤「米国西北部の帰国知識人」(498)は, 翁の渡米目的を「徴兵忌避」だとしている(p. 333)。
- 44) 『高志人』1: 昭11.9-398: 昭48.2, 『高志人 翁久允追悼号』(通巻399: 昭49.3) (国立国会図書館では13(6): 昭和23.6-通巻399: 昭49.3を所蔵<Z23-55>)
- 45) 文庫には, 『高志人』を主宰していた関係で郷土資料が多く, また, 滞米中に収集した洋書及び父源指蔵書の和漢書等が含まれている。富山市立図書館編『翁久允文庫目録』富山市立図書館, 1996<UP171-G8>参照。
- 46) 井口喜源治及び研成義塾につき, 同志社大学人文科学研究所編『松本平におけるキリスト教 井口喜源治と研成義塾』同朋舎出版, 1979<GK57-37>, 南安曇教育会井口喜源治研究委員会編『井口喜源治と研成義塾』南安曇教育会, 1981<GK57-48>, 宮原安春『誇りて在り「研成義塾」アメリカへ渡る』講談社, 1988<DC812-E35>, 田中取『内村鑑三とその継承者』愛知書房, 1995<HP113-G49>, 平林一「研成義塾と文学(キリスト教と日本社会)」『キリスト教社会問題研究』37: 1989.3, pp. 189-203<Z9-77>, 葛井義憲「巖本善治と研成義塾一井

口喜源治覚書『名古屋学院大学論集』31(4)：1995.4, pp.1-25<Z6-622>等を参照のこと。

- 47) 『暗黒日記』の主な版につき以下のとおり。『暗黒日記』東洋経済新報社, 1954<210.75-Ki345a>, 『暗黒日記 1-3』評論社, 1970-73(復初文庫)<GB531-10>, 『暗黒日記 昭和17年12月9日-20年5月5日』評論社, 1979(復初文庫)<GB531-85>, 山本義彦編『暗黒日記 1942-1945』岩波書店, 1990(岩波文庫)<GB531-E75>, 橋本文三編集・解説『暗黒日記 戦争日記 1942年12月-1945年5月』評論社, 1995<GB531-E293>, A Diary of Darkness: The Wartime Diary of Kiyosawa Kiyoshi. Princeton: Princeton Univ. Pr., 1999.<GB531-A144>。また, 白井吉見編『現代教養全集 第18』筑摩書房, 1960<081.6-U772g>以降『精選復刻長野県稀覯本集成 第2期(昭和)』郷土出版社, 2000<KH6-G489>まで, 多くの全集・大系等に収(抄)録, 復刻されている。
- 48) 北岡の本書以降の論稿「清沢冽におけるナショナリズムとりベラリズムー一日中戦争下の欧米旅行日記より」『立教法学』42: 1995, pp.1-38<Z2-47>も参照のこと。
- 49) 「ララ物資」について, 例えば, 『ララ救援物資について』厚生省社会局, 1950<EG44-G47>, 上坂冬子「焼け跡の日本を救ったララ物資の生みの親」『中央公論』101(14): 1986.12, pp.259-273<Z23-9>, 田村紀雄「『ニューヨーク日米』とララ物資」『図書』576: 1997.5<Z21-184>, 飯野正子『もう一つの日米関係史紛争と協調のなかの日系アメリカ人』有斐閣, 2000(『ララ』救援物資) pp.143-168)<DC812-G129>等を参照。
- 50) 『ユタ日報復刻版』全7巻「ユタ日報」復刻松本市民委員会, 1994-95<Z99-941>は, 各巻に, 収載『ユタ日報』紙面に沿った解題を付し(1-3巻: 篠田左多江, 4-5巻: 飯野正子, 6-7巻: 糸井輝子), 第1巻に山田晴通「概説『ユタ日報』—その歴史と意義」(pp.431-435)が, 第7巻には田村紀雄「ラジオ・トウキョウ、『ユタ日報』で伝えられた大本営発表」(pp.429-434)が収録されている。またこれに先立ち, 田村紀雄編『復刻『ユタ日報』(一九四〇〜一九四五)』五月書房, 1992<YP21-97>も刊行されており, 田村紀雄「解説『ユタ日報』」(pp.372-386)及び, 東元春夫「『ユタ日報』の最後の読者たち」(pp.387-392)が『ユタ日報』創廃刊の経緯を詳細に記録している。
- 51) 芳賀の新聞発行活動については『紐育ラプソディ』『自由の女神よアメリカを見よ』等に詳しい。田村[ほか]「紐育日系新聞小史」(534)は, 『北米新報』創刊の経緯等についての芳賀へのインタビューを収録する(「3 芳賀武の『北米新報』」pp.131-143)。また, 田村紀雄監修『ニューヨーク日米新聞(一九四五〜一九五二)敗戦後日系社会の情報機関紙重要紙面・縮刷版』五月書房, 1996<UC151-G2>所収の「解説」(田村紀雄「『北米新報』の同人達」pp.2-7, 白水繁彦「エスニック・メディアの送り手—『北米新報』『ニューヨーク日米新聞』を始めた人たち、支えた人たち」pp.8-16)も参照のこと。
- 52) 田村『鈴木悦』は, トルストイ『戦争と平和』完訳本の刊行を1917年(大6)初

夏としているが、国立国会図書館所蔵本は、島村抱月・鈴木悦共訳『戦争と平和全訳』上・下巻、目黒分店、大正5<357-201>であり、奥付も「大正5年12月18日発行」となっている。

- 53) 鈴木悦の生涯は、小説家・田村俊子(1884(明17)-1945)との関係抜きには語れない。この件に関しては多くの文献があるが、例えば、瀬戸内晴美『田村俊子』文藝春秋新社、1961(田村俊子年譜：pp.329-342)<910.28-Sa913St>ほか、工藤美代子、スーザン・フィリップ『晚香坡の愛 田村俊子と鈴木悦』ドメス出版、1982(参考文献：pp.258-259, 田村俊子・鈴木悦年譜：pp.264-274)<KG614-128>が詳しいし、『田村俊子作品集 第3巻』オリジン出版センター、1988(田村俊子年譜：pp.445-465)<KH589-E17>は、二人の「日記」「書簡」を収録しており、悦・俊子の関係を解く資料として重要である。
- 54) ハワイにおける個別の日系新聞に関する文献について、例えば以下のものも参照のこと(含再録)。【日布時事・布哇タイムス】村山有「苦闘する邦字紙 布哇タイムスの六十周年」『新聞研究』57：1956.4, pp.14-15<Z21-88>、【馬哇新聞】沖田行司編『ハワイ日系社会の文化とその変容—一九二〇年代マウイ島の事例』ナカニシヤ出版、1998(同志社大学人文科学研究研究所研究叢書 29)<DC812-G74>、【布哇殖民新聞】沖田行司「海外移民の教育史的研究(上)—『布哇殖民新聞』の教育記事を中心として」『キリスト教社会問題研究』35：1987.3, pp.75-103<Z9-103>、【洋園時報】田村紀雄「Kauai島『洋園時報』創刊の背景—1920年日・比耕地労働者のゼネストの中から」『東京経済大学人文自然科学論集』96：1994.3, pp.165-180<Z22-394>、「一九二〇年耕地ゼネストと『洋園時報』」田村編著『正義は我に在り』pp.145-172<UC151-G1>、【Hawaii Herald】‘The Hawaii Herald’ 11(10)：1990.5.18(10th Anniversary Issue)、ウエスリー・ウエウテン「ハワイの日系二、三世と『ハワイ・ヘラルド』」田村編著『正義は我に在り』pp.249-268<UC151-G1>。
- 55) アメリカ本土における個別の日系新聞に関する文献について、例えば以下のものも参照のこと(含再録)。【日米新聞】鶴谷寿「『日米』創刊号をめぐって幸徳秋水が見たもの」『汎』7：1987.12, pp.140-145<Z23-548>、【羅府新報】山本武利・田村紀雄「加州日系紙の新聞広告と経営—1910~1940」『東経学会誌』132：1983.9, pp.187-237(日系新聞研究ノート 1)<Z22-393>、田村紀雄・有山輝雄「1924年移民法と日系新聞〔含資料〕」『東京経済大学人文自然科学論集』75：1987.3, pp.135-168<Z22-394>、有山輝雄「一九二四年移民法と『羅府新報』」田村編著『正義は我に在り』pp.173-196<UC151-G1>、田村紀雄・ハヤシカオリ「『羅府新報』の英文欄—1926~1942 紙面分析と記者経歴」『東京経済大学人文自然科学論集』87：1991.3, pp.33-64<Z22-394>、林かおり「『羅府新報』と愛国運動」田村編著『正義は我に在り』pp.197-224<UC151-G1>、Hayashi, Kaori, “History of The Rafu Shimpo: Evolution of A Japanese-American Newspaper, 1903-1942.” Master’s Thesis, California State Univ. Northridge,

1990. (ユニオンプレスより刊行, 未見<未所蔵>)【同胞】田村紀雄「反ファシズムの新聞『同胞』—1937年~1942年 [含資料]」『東京経済大学人文自然科学論集』78: 1988.3, pp.139-178<Z22-394>, 『同胞復刻版』御茶の水書房, 1988 (付録: 田村紀雄「反ファシズムの新聞『同胞』」<Z99-790>, 田村紀雄「反ファシズムの新聞『同胞』」田村編著『正義は我に在り』pp.269-224<UC151-G1>, 【シカゴ新報】田村紀雄『『シカゴ新報』の成立と日系人左翼の役割』内川芳美・森泉章編『法とジャーナリズム 清水英夫教授還暦記念論集』日本評論社, 1983, pp.217-234<UC21-52>, 陸井三郎編『ヒステリー・エージ』月曜書房, 1952(邦字新聞“シカゴ新報”より編集)<302.53-Ku776h>。

56) 新井の新「史料」発見に基づく研究と蛭原『日本邦字新聞雑誌史』等との異同については、藤野雅己「北米における初期日系新聞をめぐる諸問題」(455)を参照のこと。史料発見を契機として、自由民権期邦字新聞に関する論稿が相次いで発表されている。例えば以下のものを参照のこと。新井勝紘「アメリカで発行された新聞『大日本』考—南方熊楠、福田友作、茂木虎次郎、堀尾権太郎、粕谷義三」『田中正造とその時代』3(通巻13): 1982.10, pp.118-127<Z6-1077>, 藤野雅己「福田友作ノート」『田中正造とその時代』4(通巻14): 1983.7, pp.98-111<Z6-1077>, 藤野雅己「『金門日報』創始者永井元と松本英子」『田中正造の世界』2(通巻16): 1984.11, pp.30-36<Z6-2165>, 田村紀雄・藤野雅己「オークランド『新日本』新聞の基礎的研究 [含資料]」『東京経大会誌』144: 1986.1, pp.363-406(日系新聞研究ノート 8)<Z22-393>, 相川之英「謎につつまれた明治邦字紙の原形 海外で初めて発行された日本語新聞『東雲雑誌』—挙転載『汎』1: 1986.6, pp.203-274<Z23-548>, 竹内善信「在米民権新聞『新日本』と南方熊楠」『ヒストリア』136: 1992.9, pp.70-79<Z8-95>, 田村紀雄・大沢隆「『蒸気船』新聞と萌芽期の桑港日本町—大澤栄三の活動を中心に」『東京経済大学人文自然科学論集』97: 1994.7, pp.3-32(在米日系新聞の発達史研究 21)<Z22-394>, 竹内善信「新日本新聞社からの手紙—熊楠と自由民権」『文学』8(1): 1997.1, pp.100-103(南方熊楠<特集>)<Z13-B484>, 「南方熊楠 対 長坂邦輔—『珍事評論』の背景」『熊楠研究』1: 1999.2, pp.14-20<未所蔵>等。南方と在米民権家との関係については、『熊楠研究』1所収「南方熊楠文献目録(1)(1980~1997年)」を参照のこと。新井が橋本家(入間市)で発見した『第十九世紀』『自由』『愛國』(「入間市博物館」に寄託)については、阪田安雄らによって解説が進められ、現代史料出版より復刻刊行が予定されている。

57) 在米日本人社会における「福音会」の歴史的重要性に着目する研究動向は、'UCLA・JARPコレクション(Collection 2010)'所蔵「福音会沿革史料」及び阪田安雄私蔵資料を基に解説・整理され, 280.同志社大学人文科学研究所編『在米日本人社会の黎明期「福音会沿革史料」を手がかりに』現代史料出版, 1997<HP77-G4>として纏められている。また史料も, 阪田安雄[ほか]共編『福音会沿革史料』現代史料出版, 1997<HP3-G5>として復刻刊行されており, その概要及

び意義等につき阪田『『福音會沿革史料』解説』が詳述する。

- 58) 『北米新報』(→『ニューヨーク日米新聞』)創刊号(1945年11月15日)から1952年12月までの重要記事が、田村紀雄監修『ニューヨーク日米新聞(一九四五〜一九五二)敗戦後日系社会の情報機関紙 重要紙面・縮刷版』五月書房,1996<UC151-G2>として復刻されている。
- 59) 強制収容所で発行された日系新聞については、『トパーズ・タイムズ 日系人強制収容所新聞』全10巻・別巻1,日本図書センター,1990<Z99-882>が復刻されているほか、アメリカ議会図書館所蔵の‘Japanese Camp Papers’(含む『格州時事』『ロッキー新報』)がマイクロ化されている<YD-350>。大戦時及び強制収容所発行の日系新聞関連文献として以下のものも参照のこと。水野剛也「日系アメリカ人戦時収容所のキャンプ新聞と冬季休暇報道—収容初年の冬季休暇報道に見る二面性とキャンプ新聞の言論活動の再検討」『マス・コミュニケーション研究』54:1999.1, pp.184-198<Z21-85>、「日系アメリカ人立ち退き・収容問題と日系人擁護派プレス三つの日系人擁護論とその特質」『メディア史研究』8:1999.3, pp.56-75<Z21-B110>、佐伯,バリー・田村紀雄・白水繁彦「アメリカ戦時収容所の新聞活動—『エル・ウォーキン』と『アウトポスト』」『東京経済大学人文自然科学論集』62:1982.11, pp.175-208(在米日系新聞の発達史研究 2)<Z22-394>、田村紀雄[ほか]「Heart mountain Sentinel と Bill Hosokawa [含資料]」『東京経大会誌』137:1984.9, pp.343-412(日系新聞研究ノート 5)<Z2-393>、森田幸男「Heart mountain Sentinel 紙の一分析—日系二世男子の徴兵問題(1942-1947)」『金沢女子大学紀要文学部』1:1987.12, pp.30-52<Z22-1460>、Omura, James. “Japanese American Journalism During World War II.” Nomura, Gail M. et al. ed. *Frontiers of Asian American Studies: Writing, Research, and Commentary*. Pullman: Washington State Univ. Pr., 1989, pp.71-80.<未所蔵>、Yoo, David K. *Growing Up Nisei: Race, Generation, and Culture among Japanese Americans of California, 1924-49. The Asian American Experience*, Urbana: Univ. of Illinois Pr., 2000.<未所蔵>。
- カリフォルニア大学パークレイ校バンクロフト図書館所蔵 ‘*Japanese American Evacuation and Resettlement Records Collection*’ は、‘*Japanese American Evacuation and Resettlement Study (JERS)*’ 及び ‘*WRA*’ の史資料からなる(前掲、『参考書誌研究』No.48, pp.27-28, p.39を参照)。その概要は、187. Barnhart, *Japanese American Evacuation and Resettlement. 1958*<岸-703>で知ることができる。‘JERS’ の最近の動向につき、‘*Bancroftina*’ 109:1995.9.(<http://www.lib.berkeley.edu/BANC/Friends/>) を参照のこと。また、Niiya, ed. *Japanese American History*. pp.185-186, updated ed. pp.221-222, 及び上掲 Yoo, *Growing Up Nisei*. pp.149-171 (‘Recording Nisei Experience’) も参照のこと。
- 60) カナダにおける個別の日系新聞に関する文献について、例えば以下のものも参照のこと。【大陸日報】田村紀雄「日系ランバージャック達の団結—IWW系機関

紙群と『大陸日報』の役割』『東京経済大学人文自然科学論集』109：2000.3, pp. 29-54(在米日系新聞の発達史研究 26) <Z22-394>, 【大陸時報】小林多寿子「トロントの日系社会形成と日系新聞—1950年代の『大陸時報』分析」『浦和論叢』10：1993.4, pp.97-130 <Z22-1598>, 【日刊民衆】田村紀雄「梅月高月と『日刊民衆』—カナダ日系人『キャンプミル労組』の機関紙活動 [含資料]」『東京経済大学会誌』151：1987.6, pp.235-272 <Z22-393>, 「不況下の『日刊民衆』—1929～1936年の Camp Mill Union[含資料]」『東京経済大学人文自然科学論集』82：1989.7, pp.47-85(在米日系新聞の発達史研究 12) <Z22-394>, 「1937年日中戦争時の『日刊民衆』—日本人労組 Local 31 と会社町 Ocean Falls[含資料]」『東京経済大学人文自然科学論集』89：1992.3, pp.143-157(在米日系新聞の発達史研究 14) <Z22-394>, 「『日刊民衆』終刊事情—日米開戦とバンクーバー Local 31」『コミュニケーション科学』3：1995.6, pp.27-41 <Z6-B329>, 【The New Canadian】田村紀雄「New Canadian の創刊とその晩香坡時代—1938～1942」『東京経済大学人文自然科学論集』103：1997.2, pp.47-58(在米日系新聞の発達史研究 22) <Z22-394>, 「戦時・日系人移動と世論形成過程—The Vancouver Sun と The New Canadian」『東京経済大学人文自然科学論集』105：1998.2, pp.79-94(在米日系新聞の発達史研究 23) <Z22-394>, 「戦時, Kaslo の日本語新聞—The New Canadian と The Kootenaiian, 文化の交差点」『東京経済大学人文自然科学論集』107：1999.1, pp.37-58(在米日系新聞の発達史研究 24) <Z22-394>, 「The New Canadian エスニック集団の機関紙—1943.4～1945.7」『東京経済大学人文自然科学論集』108：1999.10, pp.57-80(在米日系新聞の発達史研究 25) <Z22-394>。

(じん しげじ 逐次刊行物部雑誌課)